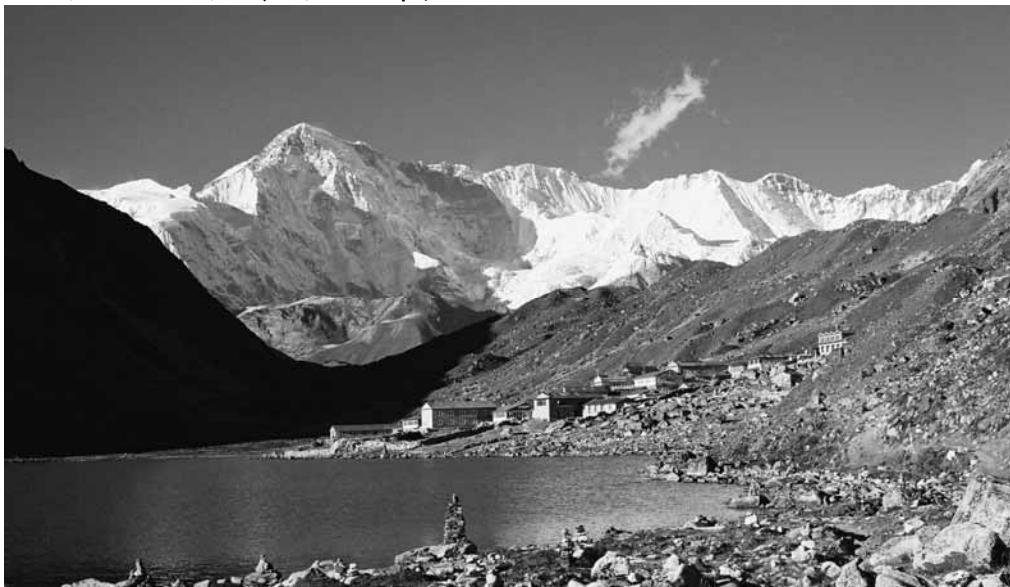


針葉樹会報

第 121 号
2011 年 6 月



目次

■ ■ ■ ■ ■ 追悼 ■ ■ ■ ■ ■									
突然逝ったショーティを悼む … 石山本シヨーティとわたし … 永井グルメのショーティさん … 小林シヨーティとのヒマラヤ・トレッキング … 有賀山本尚禎君の死を悼んで … 仲田「かくれた記録」 … 大橋生き方を楽しむ達人 … 倉知山本さんとの山行の思い出 … 本間富士通時代の山本尚禎さん … 三井尚禎さんと「ヒマラヤ蕎麦」 … 三森長野を「庭」に … 山本									
ポーランドから二つの栄誉 … 中村われわれの現役時代 … 原クーンブ・ヒマール・トレッキング報告 … 中村									
雅明 博貞 保 佑 茂 充 博 浩 敬 喜治 修 盈									
編集後記 …									
三月会通信 …									
表紙写真＝チョー・オユーとゴーキョのロッジ群									
撮影・岡田健志									

44 39 29 26 22 19 18 17 16 12 11 10 7 5 3 2

発行日 2011 年 6 月 23 日

発行者 針葉樹会報
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷株

針葉樹会報
第 121 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事／小島和人、井草長雄
川名真理

追悼——山本尚禎氏

突然逝ったショーティを悼む

石 弘光（昭36年卒）

ショーティこと山本尚禎が、忽然とわれわれの眼の前から姿を消した。彼の訃報を聞いたときには、にわかに信じられない思いだつた。例年のように昨年12月に恒例のヤロー会の忘年会が夫婦連れで丸ビルの中華料理「筑紫樓」で賑やかに開催された。ショーティは、いつものことながら一座の主役でありよく飲み、食べそしてしゃべっていた。彼の提供する話題で、座はいつも盛りあがつてくる。

ショーティが最近、皮膚がんを患っていることはすでに彼の解説もありヤロー会の仲間には周知の事実であった。その病院での闘病生活も、きわめてユニークでいつも病院の階段を上り下りし足腰を鍛え、トレーニングに励んでいた話など聞くとても深刻な癌患者とは思えなかつた。

それがわずか2カ月後に、われわれと永遠の別れになるとは本人はもとよりご家族も、予想しなかつたに違いない。10名いたヤロー会のメンバーのうち、中島、大賀、小林（進）、山本そして中川の、半分がいなくなつた。この5人とは、1957年に一橋に入学して山岳部に入部、最初の新入生歓迎コンパで顔を合わせて以来（中島だけは5月の入部だつたかもしれない）、実に半世紀以上の付き合いであつた。たしかこの歓迎コンパに出席していた部員のうち、この世に残つているのは私だけである。寂寥の感が、全身を襲つてくる。

ショーティとは、4年間四季折々の合宿や個人山行で一緒であつたが、不思議とザイルなど結び2人だけで行動した記憶はない。新人部員時代を終える頃、同期の部員もだいぶ減りまた何人かは2年生から入部してきて、ヤロー会の構成は変わつた。しかし2年、3年部員になるにつれわれわれは山に注ぐ情熱も増し、各自確実に成長をしていった。そのなかでショーティは、合宿で人の嫌がることをまさに率先してやり、部員の取り纏め役として皆から一目置かれる存在であつた。

たしか3年生の夏山合宿以来、縦走のとき



のパーティのトップはショーティがやることになつた。時に20人近くにもなるパーティを重荷で遅れそうになつた奴に気を配りながら、一般の登山者の邪魔にならぬよう縦走路を一体感をもつて先導するのはかなり難しい。先頭が速すぎても遅すぎても、文句が出やすい。この点、ショーティがトップならと下級生も含め全幅の信頼を置いたものだ。

合宿で私がショーティと個人的にかかわった最大の思い出は、3年生の冬山合宿で常念岳の登りで烈風に叩かれ、両耳がブリキ板のようになり酷い凍傷になつたことである。特にショーティと私の凍傷は酷く、2人だけ一足先に下山し病院に駆け込んだほどであつた。その折、2人とも医師から耳を切り落としあつた。その折、2人とも医師から耳を切り落としあつた。



1959年7月26日、剣岳定着夏合宿を終え、縦走初日の朝、立山別山山頂にて。

3年生の最も活躍した頃に在籍したヤローハー全員10人がそろった貴重な写真。

手前左から、三井、三股、大賀、中島、倉知、

中列左から、有賀、江面、大、中川、永井、小林正直、

三列目左から、石、山本、その背後は小林進二。写真提供・倉知

しばお互いの耳を見ては無事でよかつたと言
い合つたものだ（詳しくは、針葉樹会報11
8号で書いてあるので、ここでは再述は避け
ることにする）。

今となつては、あの豪快な笑い声と皮肉つ
ぽいコメントが聞けないのが実に寂しい。心
からのご冥福を祈つておる。

山本ショーティとわたし

永井 新也（昭36年卒）

相鉄二股川駅から雨の中を葬儀場へ歩く。

大賀二郎君が亡くなつたときは、有賀、ショーティとこの駅で待ち合わせ、大賀邸に弔問に行つた事を思い出しながら。葬儀に行くと自分に言い聞かせながら心がイライラして落ち着かない。葬儀式場で祭壇の写真を見て、「やつぱりショーティだつた」と失礼な言い方だがほつとした。余りに突然の訃報だつた。大学に入学したとき、ショーティと私は同じEクラスで、二人とも商学部だったので、席も近かつた。Eクラスには故大賀二郎、仲

田修、三股宏の三君もいてヤロー会の半分位を占めていた。彼は普段は優しくよく気の付く男で、山へ行けば沈着で、しかも積極的に前へ向かっていく頑固な人だった。

私が山岳部に入部した時、飯田橋の靴屋へ一緒に行つてくれ靴屋との交渉などもしてくれた。夏合宿の前にはショーティ等とアメ横へ買い出しにでかけた。ここで牛肉の塊を買い、腐るのを防ぐため、私の家の工場で醸造した白味噌4kgで包み込み、超特大のキスリングに他の登山用品とともに入れ、キャンプ地まで担いで行つたものだつた。彼はハンゴウの水の量や音で炊き具合をみる方法など、食事の作り方に詳しかつた。体よりはみ出したキスリングを背負いベレー帽をかぶり、眼鏡をかけた細い眼で微笑む日焼けした顔の彼の姿が目に浮かぶ。

会社を引退してからは、針葉樹会やヤロー会の行事に積極的に参加し、その活躍ぶりを見て、彼がこんなに山好きだったとは初めて知つた。関東や信州等の山は良く調べ、また、実際に友人たちとよく登つていたようだ。志賀高原などへ奥様をつれドライブしていく、道筋に詳しかつた。膝の関節症に悩む私と、膝が良くなつたらリハビリを兼ねて一緒に扇山に登る約束をしていたが、叶わぬ夢となつてしまつた。



山岳部1年生の秋荷上げ合宿、穂高小屋のそばで。
奥穂高岳を背に左から、中島寛、山本尚禎、永井新也、大賀二郎、仲田修。写真提供・永井

平成14年6月にヤロー会として初めての登山として仙丈岳に登つた。故中川滋夫、ショーティ、有賀、仲田と私の五名である。4時ごろ長衛荘をスタートした。ショーティがトップで、いつもの調子ですたすたと登つていく。8時半には頂上に着き、快晴の空と目の前の北岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山などを満喫した。下りは雪解け水を蹴散らして11時30分には長衛荘のすぐ手前までおりてきた。ショーティが長衛荘と連絡すると早すぎることで、2時間位時間調整をして長衛荘に入笠山登山では強風の中ショーティがパ

戻り、新宿行きのバスがでる、仙流荘まで車で送つてもらつた。

ヤロー会には「小林正直君と山へ登る会」というのがあって、二年に一度山へ登つている。車いすの生活をしている小林正直君を励まそうと、故中島寛君の呼びかけで始まつたもので、平成8年9月に大町の中島君の別荘にヤロー会会員が夫人同伴で集まつた。この時は大町の蟹で大いに盛り上がり、翌日は雨で山には登れなかつたが、山岳博物館や美術館などを中島夫妻に案内してもらい、有意義なスタートとなつた。以来ヤロー会では毎年の忘年会とこの「登る会」は夫人同伴が慣例となつてゐる。最近では奥様相互間の親睦も深まり、老齢化するなかで心の交流と信頼が生まれてきて次回の再会を楽しみにしている夫人も多い。今回の山本、中川両兄の葬儀には夫人たちが多数参列してくれました。

平成17年に那須連山の茶臼岳にのぼつたときは下山後キャンプ地で昼食を自炊したが、「昼飯は俺に任せろ」とショーティが大張りきりで献立や具の買い出しを自分でやり、原博貞君に特別参加してもらつて浅蜊入りのめしなど昼食会を盛り上げてくれた。平成21年の富士見高原旅行では、日程を勝手に変えて、彼にえらくおこられた。初日の入笠山登山では強風の中ショーティがパ

ぱりに感謝するのみである。

針葉樹会、ヤロー会、更にクラス会でも近くにいたショーティ。彼が亡くなつたことは未だに信じられない。

グルメのショーティさん

小林 正直（昭36年卒）



2002年ヤロー会登山、小仙丈岳山頂で。
左から、中川、永井、山本、有賀。

テイのラストを歩き皆をまとめてくれた。二日目に創造の森から、富士山、北岳、甲斐駒ヶ岳、乗鞍岳、穂高連峰まで一度に見る大パノラマを眺望出来、大感激でした。

彼は個人で山に行つても、良いものが有ると写真をとり、メールで我々に送つてくれた。一緒に行くと彼がいつもカメラマンになり、自慢の大きなカメラで撮つてくれた。だから彼自身が写つてている写真は少ない。彼の心く

山本尚楨（ひさよし）君ことショーティさんは先ず君に謝らなければならない。君が2011年1月に知らせてくれた国立博物館で開催されていた「仏教伝来の道 平山郁夫と文化財保護」特別展に2月25日にやつと行って来た。西方浄土須弥山は宮原魏さんが3990mに建設した「ホテルエベレストビューカー」からの眺めと教えてくれた壁画もゆつくり見てきた。帰宅し夕食後お祓のメールをしようと思っていた。そこへ永井から君の急逝の知らせがあり、お祓のメールをすることもできず声が震えるのみ。入院生活を送つていたことも知らなかつた。

君の考え方抜いた昼食のメニューはアサリの炊き込み（アサリは浜名湖から取り寄せ、米は那須に来る途中黒羽で仕入れて来てくれた）、豆腐とわかめの味噌汁、大根の粕漬け、特別参加の原君の豚肉の煮込みと大分産のせんまいの煮物と豪華なものでした。豚肉の加

だつた。しかし、合宿では名食として腕を揮つてくれた。君が食当で作るカレー・ライスの旨さは今でも思い出す。下ごしらえに時間をかけていたのだろうか。長雨での沈澱中のテントではグルメ話をしてくれた。おでんは銀座の「お多幸」がうまい、そばは戸隠に限ると聞いたが、いまだに行つていない。いざれおでんだけでも味わつて君を偲ぼう。

その腕を更に上げてヤロー会の仲間を楽しませてくれた。2005年5月25～26日のヤロー会夫人方を含め12人で行つた那須旅行では26日の昼の野外炊飯を一人で仕切つてくれた。午前中は10人で那須岳登山、車椅子の私はケーブル山頂駅で待つ。君は私の話に相手になり残つてくれた。下山後、キャンプ場に移動し薪と炭による飯盒炊飯となつた。この飯盒炊飯の話は3ヶ月ほど前の2月18日に牛ちゃん・アリちゃんと水沢うどんの「大澤屋」で牛ちゃんが出した話。その後牛ちゃんが3ヶ月後に他界し参加できなかつたことは残念だつた。

君の考え方抜いた昼食のメニューはアサリの炊き込み（アサリは浜名湖から取り寄せ、米は那須に来る途中黒羽で仕入れて来てくれた）、豆腐とわかめの味噌汁、大根の粕漬け、特別参加の原君の豚肉の煮込みと大分産のせんまいの煮物と豪華なものでした。豚肉の加

熱に亡き山本先輩ゆかりのダッヂオーブンを使用し、後日山本先輩に何か言われたとか。イチゴと焼き芋のデザートまで用意してくれた。この日の為に出発前夜遅くまで仕込みをされていたと奥様から聞いた。ヤロー会の男どもは君の手助けをせず、木のテーブルで酒盛り。食事は初夏の陽の下にブルーシートを敷き車座になつてした。君の心づくし、配慮、真剣さに感謝します。

ショーティさん ここ数年、君が軽いツツトワークで車を運転し各地に行つてはメル友として情報を写真添付でよく送つてくれた。いつかの春先には後立山の雪形の写真を、2010年の10月には東北から会津若松—越後魚沼—奥越後（津南・松之山）を1000kmも運転してきたとのメール、富山氷見からの剣岳の写真、雪が降れば鎌倉の雪におおわれた花の情景など簡単に遠出できない私を楽しませてくれた。更に君が1年生の昭和33年春合宿（私はまだ入部していなかった）で起きたゾロメキ発電所の取水池にN君が落下した現在の状況を写真に撮つて送つてくれた。おかげで話では分からぬ狭い橋を知ることができた。最近では白鷗高校出身の利を生かしスカイツリーの写真まで送つてくれた。車の遠出には奥様同伴で年と共にますます奥様孝行をされていた。



2005年5月、ヤロー会のメンバーが夫人同伴で那須旅行した。
男性左から、石、有賀、仲田、小林、原、永井、山本。 写真提供・小林

それにしても1996（平成8）年9月21～22日にスタートした第一回目のヤロー会旅行の夜の宴会は忘れられない。中島の音頭で大町の中島邸に夫人方も集まつた21日の夜、お互いにかなり飲んでいた。君は私の頭をピシャピシャ叩き「コバショーお前も毛が少ないな」というや頭をがぶりと噉む。丁度中島が見ていて、いつもの大人風の口調で「ショーティよせよせ」と離してくれた。愛情の表現が噉むという行動に出たものだろう。今では懐かしい思い出である。

眼鏡の奥の細い目を一層細くし、大きな口を横に広げ、日焼けした頬いっぱいに笑いながら大声で話をしてくれたショーティさんの容貌は忘れられない。どうぞ彼岸で先に行つたヤロー会の面々と楽しんでください。

ショーティとの ヒマラヤ・トレッキング

有賀 盈（昭36年卒）

「昨日の御礼：昨日丸ビル筑紫樓で皆さんのが元気な姿に安心しました。良いお年をお迎え下さい。……（中略）……中川からアメリカの山へ登る提案がありました。私は参加の気持ちがないと言いました。皆さんに別れた後、六本木の富士フィルムギャラリーへ内野志織氏のオーロラの写真展を見に行きました。アメリカの山でなくオーロラを見に行く提案なら心が惹かれます。但しオーロラは現地に行つても出現の可能性が低く、太陽のない世界に2週間も3週間も滞在する必要があるようです。写真展で求めた絵葉書のコピーを添付します。」

これは2010年12月12日付の山本尚穎、通称ショーティからのメールで、その前日行われた恒例のヤロー会忘年会での話題の一つについて感想を述べたものである。この会ではショーティも中川もいつもと変わらず

元気で、例のごとく奥さん方も参加して賑やかな談笑が続き楽しい忘年会であった。それだけに2月25日ショーティの突然の訃報が入った時、その事実をなかなか呑み込めずただ茫然とするのみだった。しかもひと月も経たないうちにこんどは中川が逝ってしまった。以来、寂寥感あるいは喪失感としか言いうがない気持ちに依然として苛まれている。元気だった時の二人の姿をしきりに思い出している自分に気が付くことがしばしである。ショーティの場合、二人で3年つづけてヒマラヤ・トレッキングに行つただけに思い出すことは多々ある。

最初のネパール行は1999年11月、中島寛のご遺族が中島の供養にエベレスト・ビュー・ホテルのあるシャンボチエに行かれたの同行した時である（会報90号）。ヤロー会からは中川・山本・有賀が参加した。この旅の後半、皆と別れてショーティと二人アンナブルナ山麓の村を三日間歩いて、二人ともすっかりネパールの山と人と山村の風物の魅力にとりつかれた。お互い60歳をこえてもう若くはないがまだ余力が残っているうちに、ネパールをあちこち歩き回ろうではないかと意見が一致した。

そういう訳で翌2000年はエベレストの展望台ともいえるカラパタールを目指した。

10月9日ルクラから歩き始め。パクデイン、ナムチエバザール（2泊）、タシング、タンボチエ、ディンボチエ（2泊）、ロブジエと進み10月17日カラパタル登頂。翌日ロブジエからペリチエ、デボチエを経て20日シャンボチエのホテル・エベレストビューに到着しトレッキングは完了した。この時は二人とも体調良好で2、3日もすると高度にもなれたのか益々調子があがり周囲の景観を思う存分樂しむことが出来た。カラパタルの登りも順調で9時半到着して12時まで暖かい日差しの下で心行くまで豪華な景観を楽しんだ。二



2001年10月、エベレストビューホテルの玄関で。
山本（左）と有賀。写真提供・有賀

人とも大満足のうちに帰路についたことは言うまでもない。

この道中で気が付いたのだが彼には決まつた日課がある。キャンプに着くと天候が悪くない限り外に出かけ1～2時間は帰つてこな

い。近くを歩き回つて写真を撮つたり、ノートに絵を描くなどしているという。歩き回るといつても彼の場合は半端なものではなく、近くの丘や尾根を1～2時間登るのも厭わないのだ。たとえばタンボチエのキャンプ地ではところどころ祈祷の旗が立つている細い急坂を1時間ほど登つた。エベレスト山群が一層よく見え、はるか眼下には僧院とそれを取りまく草原が小さく見えて、これはこれで面白い景色だつた。しかしこういうのに毎回付き合つていたら私の身がもたなかつただろう。

もう一つの日課は早朝行動だ。朝の4時前後に気が付くともう出かけてモーニングティーには帰つているということが度々あつた。ナムチエバザールの上に丘があつてエベレストやアマダラム等の山々の展望台となつてゐる。朝3時半ごろ隣の寝袋が空になつてゐるのに気がついたが6時近くになつて戻つてきた。展望台の丘で星とエベレストの写真をとろうと思つて、雲の晴れるのを待つたが駄目だったという。それに丘の上に

ある兵営の守衛に誰何されたが観光客だと説明したらわかつてもらえた由。国によつては色々と取り調べられる時勢だから、モーニングティーまでに帰つてこられたのは幸運であつた。

ディンボチエでは4時過ぎにタウチエの上に懸る月を見ながら近くの丘を登り、朝日にくつきりと浮かび上がるカンテガとタムセルクを心行くまで楽しんだ。ペリチエでも朝5時ごろ彼の声で外に出てみたらチョー・オユーが朝日を浴びて絶好のシャツターチヤンスだつた。タンボチエでは真夜中に起こされ何事かと思ってテントから出たら、満月が煌々と輝きその下にエベレスト山群が静かに横たわつていて寒さも忘れて見とれたものだつた。この全行程中の二人の運動量を比べたら、おそらく彼は私の1・5倍くらいは動いていたと思う。とにかく強い好奇心、それを満たす行動力・体力に人並み以上に恵まれた彼のお蔭で、私の旅の内容もより一層充実したものになつたことは間違ひない。

翌2001年はエベレストのもう一つの展望台であるゴーキョピークを目指した。9・11テロで世の中がまだざわついている中、10月7日カトマンズ着、8日ルクラから歩き始めてパクデイン、ナムチエバザール（2泊）、

ポルツェタンガ、ドーレ、マッチャエルモ、ゴーキヨと進み、ゴーキヨピーク登頂後マッチャエルモ、ポルツェタンガを経て18日シャンボチエのエベレスト・ビュー・ホテルに到着した。

前年のカラバタール行では二人とも体調万全であったが今回はそうはいかなかつた。まずナムチエバザールからポルツェタンガに向かう途中モン・ラの峠を越えるときに私の持病である不整脈が発生した。こうなると血の巡りが悪くなり登りのスピードが極端に落ちてしまうのだが、4000m近い高度では空気が希薄なため一層酸素不足の状態になつてしまふ。極端な胸苦しさ、頭痛、手足の痺れでふらふらになりながら辛うじて峠に到着した時は心底ほつとした。これ以後ほぼ毎日不整脈発作が起つたが、これ以外は登つている最中でなかつたのが幸運の一語に尽きる。

4日目ドーレの辺りからチョーオユー、

ギヤチュンカン、ゴジュンバカンなどのジャイアンツが見え始めこのルートも佳境に入ってきた。しかしこの頃からショーティの不調が始まつたようで、マッチャエルモに近づいたころから急に遅れだし苦しそうだった。食欲も無くなつた。朝食にはおかゆがあるので、せめておかゆだけでも食べるようと言つたところ、こんな不味いもの食えるかと剣もほろ

だつた。

15日8時ゴーキヨピークに向け出発。頻繁

に休みながら10時頃エベレストが見える地点まできたがここで遂に彼は断念した。自分一人で大丈夫だからお前はガイドと一緒に登

れと、かえつてこちらをつよく励まして降りて行つた。登りを再開して11時頂上着。ショーティの無念を思いせめて写真だけでもとチョーオユー、ゴジュンバカン、ギヤチュンカン、プモリ、エベレスト、マカルーの大パノラマを撮りまくつた。

帰りは一人とも帰心矢の如しで休養日も省略して歩き、あのモン・ラが越えられるか非常に不安であったが何とかこれも登り切つて、18日エベレスト・ビュー・ホテルに到着した。その夜ホテルのロビーでお互いの無事を祝いククリというネバールのラム酒で乾杯した。食欲と飲み欲とは別物なのか、彼がこの酒を3杯も飲んだのは感心したものだ。

彼の不調の原因は胃の出血で、かなりの血液が失われ危ないところだったが、帰国して入院治療の結果ほどなく全快した。その後も日課の早朝ウォーキングを続けていて、ある時期からはカトマンズのホテル・ヒマラヤのバーでまたまお会いした三浦雄一郎氏のトレーニング法を取り入れて足首に重りをつけ歩いていると聞いた。



1999年11月、エベレストビューホテル近くの中島寛碑にて。
左から、中川、宮原巍、山本、有賀。写真提供・有賀

私はこれ以降ヒマラヤ行きを諦めたが
ショーティはその後2004年、倉知・三森
両会員が計画したパマリ・ヒマール登山隊（会
報103号「ヒマラヤの山に登つてみよう」）
に参加した。残念ながらこの山は地元の村と
の聖山騒ぎで登頂に至らなかつたが、ショーティ
は体調万全でこの遠征を多いに楽しんだ
らしい。この隊のサーダーが彼に「あなたが
一番強い。あなたとなら必ずあの山は登れる」
と言つてあおられたと話してくれたが、その
時の無邪気なまでの嬉しそうな彼の表情が忘
れられない。恐らく“あちら”でも精力的に
あちこち歩き回つているに違いない。

思ひは尽きないが李白の友人を送るという
詩を記して締めくくりとしたい。

青山 北郭に横たわり
白水 東城をめぐる
此の地 一たび別れを為し
孤蓬 万里に征く
浮雲 遊子の意
落日 故人の情
手を揮つて 段より去れば
蕭蕭として 班馬鳴く

山本尚禎君の死を悼んで

仲田 修（昭36年卒）

君は存在感の大きな男だつた！

「ヤロー会」といえばショーティ、ショーティ
といえばヤロー会」と誰しもが連想するぐら
い山岳部における君の存在は大きかつた。
その君の突然の死を知つたときは“まさ
か！”と耳を疑い茫然自失の状態になつた。

あんなに元気だつた君がこんな事になるな
んてどうしても信じられなかつたからだ。

昨年の暮れのヤロー会恒例のクリスマス会
で顔を合わせたのが君との最後の出会いとな
つてしまつた。その席上で君の振る舞い
はいつもと寸分違わず話題の中心に居て宴席
を大いに盛り上げていた。それから僅か3ヶ
月あまりで君が不帰の人となつてしまふなど
と一体誰が予期していただろうか？ それは
ど君の死はあまりにも突然だつた。
今思えば2009年7月15日、16日の日
程で登つた入笠山が君との最後の山行となつ
てしまつた。その時のメンバーは君と奥様、

有賀夫妻、小林正直君、永井夫妻、三股君、
と小生の9人だつた。

その夜の宴席でも君はいつもとまつたく交
わらず大好きな日本酒を豪快にあたりながら
辛辣な言葉を吐き、仲間をひやかしたり笑わ
せたりなどして大いに座を盛り上げていた。
早起きの君は翌朝4時にはもう愛用のカメ
ラを鷺掴みにしてホテルを飛びだして行つ
た。小生も慌てて飛び起きて君の後を追つた。
君は忙しそうに場所を変えながら快晴の空
にそびえる甲斐駒の、朝日に輝く勇姿を一心
不乱にカメラにおさめていた。その時の君は
いつも通りのエネルギーの塊のような屈強な
男だつた。

ところがこの入笠山に行く僅か一週間前に
皮膚ガンの宣告を受けすぐ入院するように先
生から言われていたという事実を最近になつ
て知つて驚いた。すでに決まつてているとはい
え医者の薦めを断つてまでヤロー会の山行へ
の参加を優先してたというのだ。なんといふ
ことだらう！
この事実を知つて君のヤロー会に対する友
情の深さに思わず頭が下がり何か熱いものが
こみ上げてくるのを覚えた（君はこのあと闘
病生活に入り10月には完治されて退院され
たと聞く）。

あの時の君はそんな素振りを少しも見せる

ことなく入笠山を登りながらいつものようにしきりに山野草にレンズを向けてはこれは何の花かと声をかけてきたのをいまでも鮮明に思いおこされる。

昨年、愛用してきた登山靴の底を貼り替えた。足にピッタリ合っていた靴だったので捨てるのが惜しかったからだ。実はこの登山靴は好日山荘までつれて行ってくれたショーテ

イが推薦してくれたしろものなのだ。今思えば捨てなくてよかつたとホット胸をなでおろしている。

これからはこの山靴を履いて山を登るたびに四国巡礼者と同様の、同行二人の心境になつて君のことと思い浮かべながら登ることになるだろう。

ご冥福を祈る。合掌。

先輩・後輩から

「かくれた記録」

大橋 喜治（昭34年卒）

秘かに早月尾根から望見していた。

当時、一橋山岳部の目標は積雪期の剣岳で、その総仕上げの一九六〇年春合宿の偵察行にOBとして参加させてもらい、幸いにもバットレスに同じ思いを持つ「しょーてい」とこと山本君に出会い、「ヤロー！」ということになつた。

一九五九年五月一日、明け方に馬場島を出て、落石と腐った雪に悩まされ、雪崩に怯えながら池の谷右俣、中央ルンゼを経てバットレス末端にでた。一〇時間近くかかるつてしまつた。取付きまでの長く厄介なアルバイト題になつた。

山本君と二人で剣岳北西バットレスを登攀したのは、もう五十二年も前のことになつてしまつた。頂上に直上する北西バットレスに、先鋭といわれる登攀者たちの関心は薄く冷たかつたが、私には雄大な剣岳の象徴の一つに思え、

『まっすぐに頂上めざして登る』と彼は記録に書いている（針葉樹第12号）。このために来たのだというこだわりが嬉しかった。固い氷が張りつめた急峻な岩壁は不安定な雪をまた、ステップカットを交え神経をつかう登攀が続く。

『風はでてきた。氷はますます固くなつた。……腕が疲れたころ頂上についた。五時八分。熱い握手をした。西空が赤く焼け、槍が良く見える。……二千五百米あたりで、中川と小林（※）が出迎えてくれた。……持ってきてくれた熱い紅茶のうまさに疲れも忘れるようだつた。』

遠くに視線をむけた彼の姿は、実に印象的だつた。地味だが豊かで父親の厚い胸のように、われわれを迎えてくれたバットレスは「しょーてい」と共に忘れられないものになつた。

（※）この二人は一九六〇年三月春合宿でチンネ左稜線の積雪期初登を果たした。後に中川君達と剣岳の話になつた折、バットレスは春合宿の成果にもつながる隠れた記録であり、また山本君にふさわしいものだつたと話題になつた。

（※）北西バットレスの登攀記録について題になつた。

①剣岳—登攀ルート解説——高須茂・高瀬

具康著 築地書館（一九五六年五月）より転載。

「本峰の池の谷側はいくつもの岩稜と岩溝が交錯して相当複雑な岩場を形成しているが、われわれは剣北西バットレス、または簡単に剣西壁と仮称している。高距 200~400米。まだ誰も登った者はいないようである。」

②倉知敬会員提供の資料

・現代登山全集 創立山黒部 東京創元社
（一九七八年刊）

立教大山岳部の記録（一九三五年四月四日）
厳しい冰雪の壁に苦しみ、頂上に直上せず早月寄りの国境稜線に出てから頂上に向かっている。バットレスは中央稜、右稜、左稜となり、おそらく右稜よりを登攀したと推測される。

（追記）

山本君が一員であつたヤロー会は当初から意欲満々でヤローぜ！と前にて威勢のいい新人達だったが、意外に、ちょっとシゴクと直ぐ音をあげる可愛い連中でもあった。そのヤロー会は、その後山岳部を大きく前進させる集団に育つた。そんななかで、彼はやや静のタイプであったが山に対する姿勢に気負いのない、しかし周囲に安心感をかもしだす存在だったようだ。

山以外のことはお互い余り知らないのが山仲間だが、彼は趣味が広く多才多芸であった。芭蕉や子規の俳句をそえて「上野・浅草界隈」と題した隨想を寄せてくれた。山仕込みの探究心に溢れ、味わいのある文章に感心した。「初めてブーサンに褒められた」と照れていた。一度一緒に徘徊しようと約したが、そのままになってしまった。今時珍しく五常の徳を大切にしていた男だった。

得た満足感の方がずっと意味深いというのである。

山本尚禎さんの晩年の一時期に、私は特に密度の濃い交流をさせていただく機会を得た。それらは往往にして辺鄙な山地旅行だったり、時折顔を合わせる集まりとか、情報や文献を通じての交歓などであるが、いずれもまことに面白く興味深い体験だった。

生き方を楽しむ達人

倉知 敬（昭38年卒）

限りある人生で最も意味あるものは何か。功績とか名声などはいつか評価の変る儂いもので、唯一価値の変らぬものは自分がいかに満足したかという体験にしかないだろう。そしてそれは生命が消えればお終いだ。

そう言つたのは、世界中の未踏の山河を駆け回つた山岳探検家エリック・シプトンだが、その赫々たる探検の成果よりも、その過程で

古い友はいい友である。晩年にお互い楽しみあつた氣兼ねなさは、若い頃の共通体験が根っこにあることに大いに関係するのだろう。山岳部では学年が一年下だった私は、一緒に連れてつてもらうということが多く、いくつかの初期の登攀体験の記憶がパートナーとしての尚禎さんとセットになつていて。例えば、岩登りで初めて高度感に痺れた感覚は、剣岳チンネ上部のgチムニー・クラックという空間に浮くようなルートで知り、ま



1959年3月18日、剣岳赤谷尾根から北方稜線極地法合宿の大窓最終キャンプC3にて。山本さんは、この日C3設営のためサポート役を徹夜いて赤谷山頂C2から往復。この合宿ではもっぱらサポート役を務めた。前列左から、山本、中川、倉知、後列左から、小林進二、中山、三股、大、峰高。写真提供・倉知

を登る機会を得た。それらの登攀は、明神岳IV峰東稜（一九六一年五月・後註参照）と北岳バットレス第五尾根（一九六三年一月、丸山、中島、山本尚、倉知）であるが、尚禎さんにとってそれが名残りの山だったのか、その後は登らなくなつた。しかし、その記憶や顔ぶれは、後々ネパール遠征に結び付くことになる。

さてそれから、かれこれ五〇年。縁あつて

カトマンズに滞在していた私は、引退後ネパール・トレッキングを楽しんでいた尚禎さんに巡り合つた。麓を歩くより山に登りませんか、とお誘いしたらその気になつてくれ、後年ロルワリン奥地の山にご一緒することになり、ネパールの山は結局登れなかつたが、その後何年か日本の奥まつた山々などを度々訪ね歩くことになつた。

それらは登山でもあるが旅としての気配が濃厚で、特に遠隔地をドライブで渡り歩くのが特徴だった。ハンドルを握るのはいつも尚禎さん、名所旧跡や美味しいもの探究を率先するのも尚禎さん、村人とか宿の人とすぐに打ち解けて雰囲気が盛り上がるのも尚禎さんの人柄に尽きる。そこに共通する要素は、一にピタッと姿を消すのだが、卒業直後にはOB山行に参加、まだ学生の私は一緒に雪の岩場

手始めは飯豊や剣の雪渓登りが主眼だったが、それらにも前後の麓巡りの旅が付きまとひ、やがて主客転倒、鳥取から島根へ（大山、三瓶山）、長野・福井・岐阜（白馬朝日、能郷白山）、愛知から長野へ（三ツ瀬明神山、敗退だが奈良代山ほか）、などと登山よりもむしろ県境の峠越えが旅のハイライトとなつた。山は見て楽しむもの、人里は触れ合つて楽しむもの、旅は良き友と楽しむもの、人生は飽くなき好奇心ありて楽しむもの、なのである。

尚禎さん最後の山旅は、亡くなられる四ヶ月前の去年一〇月の丹沢・華厳山から経ヶ岳縦走だつた。きっかけは本間さんのお誘いで、登山道のない丹沢外延のひと気ない低山に登る趣向。侮れない急崖あり、沢筋へ迷い損ねあり、長い道のりを尚禎さんは元気に辿つて、お終いにはこちらが追い着けずバスに乗り損なう始末。

さて、飯山温泉宿で宴会・熟睡の翌朝、尚禎さん発案で思いもかけぬ道志川遡り長駆富士山麓の村山浅間神社行きとなつた。たまたまその以前に、富士登山史につき資料交換などをしていたので、かの有名な村山口古道の入口を見てみようということになり、静岡県境山伏峠越えのドライブをし、いつものごとく樂しき物見旅。鬱蒼たる大杉古木に囲まれた村山口を訪ね、ついでに富士宮浅間神社に立

寄り、流行のB級グルメ焼きそばを食し、旅は完成した。

この山旅は、暫くの中斷あつての再起といふ事情から、スケールもミニ版だったが、これから又おおいにやろう、というきつかけになるはずだったが、悲しくも最後となつた。実はそれ以前にも糸余曲折あり、三年前（二〇〇八）には入院とりハビリというので山旅はまつたくお休みだつた。その前年秋の白馬

朝日では、大分疲労激しく、いかにも辛そうな様子も見せていたのだつた。

しかしながら、日頃トレーニングを欠かさず体調保持に努めた末、また翌年には奥三河から伊那谷の旅で見事復帰するのだが、こうして山歩きもするうちに、健康は波間に浮沈に晒されて、知らず知らずに限界に近づいてしまつたのかなあと、撫然たる思いだ。

一方、山には行かずとも、顔を会わすと手紙やメールのやり取りは事につけ続いている。その頃の受信メールに、次の様な一節がある。

「先月は湯河原の幕山へ梅の花を、先週は津久井城山のカタクリが開く時間（9時）前に、石老山へ行つてきました。明日の命に保障が無い今、そして明日の楽しみを期待する今、お呼びのかかるのを待つ

ています。（2008・3・24）

既に覚悟した心境で、人生を楽しもうと心掛けていたのだろうか。

また、ひと頃は俳句に感性を託して、気に入つた句をファイルに貯め込むのだとメールで知らせて来て、例えばこういう句だ、というのに、

「桜餅うき世にみれんあればかな」（久保田万太郎）

と、心境を表現したかのようなものを披露したりして来たのだつた。

丁度その時は、一年前の伯耆大山行きの季節が再び巡つて来た頃、登れなかつた大山南面の谷を定点観測しているホームページを見付けた、といって、前年とは様変わりのべつたり雪を被つた画像を、尚禎さんはわざわざ送つてくれた。もう諦めてすっかり忘れていた私は、それを見て未練を感じ、

「8時すぎて真白き山を目でたどり（200

8・4・9）

と返信したら、「なかなかの傑作、これはファイルに記録しとくよ」とお褒めにあずかつた（メールした数ある句の中で、褒められたのはこれだけ）。渋る尚禎さんを山に誘い出す、ということを何につけていたのだが、その頃はまだ大山にこだわる気持ちもあり共に感したということなのだろうか。

波瀾の山旅とは別に、時折集会でお目にかかる方は、声を掛ければ律儀に皆勤という気に入りようで、いつも会話は弾んだ。集会とは、チベットの探検行を繰り返されている中村さんのお話を聞くというのがそもそももの動機であつたが、そのうちあちこちの趣向の変わつた旨いもの屋に集まるグルメ目的付きとうのが常となつた。

それも今年一月一八日、ネパールでお世話になつた日大の宮原さんの新刊本にかこつけ集まつたのが、最後のものとなつてしまつた。その時、何だか辛そうな風で、珍しくろくに話に加わらない、それがとても気になつたが、まさかこうなるとは思いもしなかつた。

そして、いくらも日も置かずハガキが届いた。（11・1・24）

「前略、突然ですが、入院してしまいました。元旦以来風邪をこじらせていましたが、先週金曜日のX線の肺は非常に荒れて居り、……今週内視鏡で肺の組織を摘出し、来週末には結果が出るとのことです。今年の寒さを病院の内で寝て過す所存です。」

検査の結果が心配だが、とりあえず山の本でもと送つたら、折り返しのハガキ（11・1・30）。

「……金曜日より化学療法……点滴三日に

入りました。……現在活字を見る気が起きません。……「月になれば活字が呼ぶ声に引きよせられそうです。」

重い病状のようだが説明ははつきりせず、それより今度のは筆記がかなり乱れていて、無理に書いた感じなのが、とても気がかりだつた。先の集まりでやはり尚禎さんの様子を心配していた中村（保）さんから、同じ入院を知らせるハガキを受け取つたので見舞いに行こう、と連絡あり、行つても邪魔なだけかもと数日ためらつた末、横浜の自宅に電話したが誰も出ない。

その夜になつて、病院帰りの奥様から電話、具合悪くて酸素吸入中、見舞いはどうも、本人は誰にも知らせるなど言つている、という難しい話を聞かされた。

「でも、早い方がいいかもしませんので……」と微妙な「了解をいただくに至り、「では一言激励だけ」と限定して、中村さんと二人、二月六日に昭和大学藤ヶ谷病院を訪ねた。

吸入マスク越しに苦しげに、突然の見舞いに応対してくれた尚禎さんは、数分話すのが精いっぱいで早々に失礼したが、呼吸難以外は普通の様子であり、奥様によれば「容態は持ち直し、医者は体力強靭だと感心している」とかで、ともあれ希望を抱いて退出してきたのだった。



2010年10月14日、丹沢経ヶ岳頂上で、本間氏と。山本さん最後の山となつたが、数カ月先のこととは想像もできないほど元気な姿を見せていた。写真提供・倉知

その後、蔭ながら心配しているしか手がなく、丸山さんも誘つて次の見舞いのタイミングを計り、二五日夕方再度電話してみたら、何と今朝逝去というのだ。まさかが現実となり、尚禎さんの生き方に漂う何かに惹きつけられたものがあつたせいだろう。その人間味に触れて、登山も旅行も手紙等のやり取りも集会も、いかにもしつくり潤うものに溢れていた。そして、その底から湧き出る類なき好奇心、それは尚禎さんの人生の豊かさを益々繁殖させているかのようだつた。まことに爽やかなものを、いつまでも持ち続けるという心のかたち、そこにこそ人間としての究極の存在感があるのだ。

私は唯の山仲間の付き合いをしたに過ぎず、それも青春期と晩年のみで、その間はすっぽり抜けた交流だつたわけだが、何故か長年の間柄と感じる繋がりがあるかのようだ。壮年期の社会活動がどうだつたか、噂程度のことしか知らないし、話し合つたこともない。山の中での雑談に、地方勤めの会社生活で知り合つた若い人たちと今でも親しく付き合つているとか、夏休みにはお孫さんとべつたり遊んでるとか、心温まる話がしばしば登場した。それだけのことではあるが、その底辺には、恬淡とした人生における心のかたち、といったものが、しっかりとあることを彷彿させるのである。

晩年の、十年そこそこだが、ゆつたり続いた交流は、ただ昔の間柄だけで成り立つはずもなく、尚禎さんの生き方に漂う何かに惹きつけられたものがあつたせいだろう。その人間味に触れて、登山も旅行も手紙等のやり取りも集会も、いかにもしつくり潤うものに溢れていた。そして、その底から湧き出る類なき好奇心、それは尚禎さんの人生の豊かさを益々繁殖させているかのようだつた。まことに爽やかなものを、いつまでも持ち続けるという心のかたち、そこにこそ人間としての究極の存在感があるのだ。

(後註)

この残雪期明神岳IV峰東稜登攀記録は、なぜか『針葉樹』の記録欄には記載漏れとなつてゐる。この機会に、私の山日記メモを頼りに、以下の補足を『針葉樹』十三号、二八八頁に加えたい。

明神岳IV峰東稜

一九六二年五月 山本尚禎、三森茂充、倉知敬

五月一日

明神主稜線縦走を狙う高橋、竹中と合流する前に、先発して三人で明神東面のどこかを登るため入山、明神養魚所少し上にテントを張る。後、宮川のコルまで往復、目標をIV峰東稜に定める。

五月二日

天気よし、六時出発。IV・V間の雪渓をつめて稜端のコルに出、アンザイレン、八時。雪稜を辿ると岩峰に遮られ、右の急なルンゼを行くと雪のコルに到るが、その先が東稜の背稜となっており、通常のルートは反対側からここへ登るらしい。

やせた雪稜、藪や這松混りの岩稜、樹木の生えた岩壁、急峻な雪のルンゼ、それらを次々に越えていく変化に富んだ登攀を、延々十三ピッチ続けた末、やっと明神連峰の主稜線に

とび出る、午後四時。

III峰の頂上まで登った後、III・IV峰間の雪渓を下り、七時帰幕。

五月三日

山本下山。上高地付近で行き交して高橋、竹中入幕。V峰東南稜ルート偵察。

山本さんとの山行の思い出

本間 浩（昭40年卒）

山本さんとは最近数回山をご一緒しました。その山歩きを思い出ししながら尚禎さんを偲びたいと思います。

最初の山は、御坂山地でした。釧路ヶ岳から途中1泊して節刀ヶ岳まで、メンバーは丸山さん・山本さん・倉知さん。山そのものは1500m強の峰続きですので、稜線上がつてしまえばママアマアなのですが、尚禎さんは脚力強化のため重い靴を履いてトレーニングに励んでいると聞いていましたから、遅れちゃいけないと後から急かされる様な気持ちでした。

私が山岳部に入った時、丸山さんは既に卒業されましたが、山本尚禎さんは4年、倉知さんは3年でしたので、OBの山行というよりもむしろ昔の合宿という感じでした。次の年には伯耆大山に、山本さん・倉知さんと。これは山有り旅有りの、尚禎さんらしい企画でした。「出雲の国」ということで、古代史の本を買い一通り勉強して出かけたわけです。山は国引き神話に合わせて、2本の杭「伯耆大山」と「三瓶山」に登りました。大山は前日4月には珍しく大雪で宿坊から歩いていけるルート、夏道を使い山頂に、帰りは大山寺経由で宿坊へ。新雪・アイゼン・無風という思いがけなく恵まれた山行でした。三瓶山は出雲の西南方向にある1000m強の山で高さはなくとも登山口が数ある面白い山でした。登山者も多く地元では人気のある山なのでしょう。下山途中池のほとりで昼にしたのですが、そのとき尚禎さんに頂いたロシヤパンが美味しく、しかも1ヶ月は保つということです。以後、私の山登の定番になりました。パン屋さんが小生宅より6キロ位で、要る都度、散歩を兼ねて何とか買出しに行きましたが、一昨年休業してしまい、残念でした。

旅の部は、まず地元の岡垣先輩（33年卒山本さんは4年—1年生の関係）に挨拶、日御碕・出雲大社を案内していただき、昔や

今はなしをいろいろ伺い楽しい時をすごすことができました。博物館で展示中の銅鐸をはじめ、レンタカーで遺跡・神社を巡り、宿坊・ベンションのご主人と歓談し、「出雲」を堪能した山旅でした。山が山登りだけに終わらず、周辺の名所古跡を訪ね美味しいものを探し人と語りあうという、尚禎さんらしい間口の広い山行だったと思います。

去年10月丹沢の華厳山にやはり倉知さんと3人で行きました。その前に山本さんは体調をくずされ、しばらく山はお休みだったのですが、回復したとのことで人があまり行かない低い山(602m)を選んだわけです。ところがこれが予想以上に大変な山で、長い尾根・クサリが欲しくなるような急な登り・迷いかねない箇所・延々と続く下山車道と人が歩かない訳がよくわかりました(チョット手を加えれば良いハイキングコースになると 思いますが)。このときの尚禎さんは登りはキツそうでしたが下りは速く、最初にバス停に到着するくらいでしたので充分回復されたなと感じました。しかしその後また体調をくずされ、結局これが最後の山行となりました。番外の山、「桃山」がありました。これは尚禎さん行きつけの横浜伊勢崎町にある洋食屋さんです。アットホームな雰囲気で家族連でもよく行かれたお店のようです。「退院され

たらここでお祝いしましよう」「そうしよう」ということだったのですが、残念ながら出来ずじまいになってしまいました。

札幌在住の蛭川さんは、山本さんには銘酒七賢など美味しいものを紹介してもらつたり、この5月には道南で家族で一緒にお花見をしましようという間柄です。結局蛭川さんも出来なかつたのですが、そんな彼と桃山で一杯飲みながら尚禎さんを偲びたいものだなと思つております。

ご冥福をお祈り申し上げます

富士通時代の山本尚禎さん

三井 博(昭37年卒)

一橋山岳部入部以来50有余年のお付き合いになる山本尚禎さんが亡くなられました。思い出に残ることは多々ありますが、その一端を振り返って故人を偲びたいと思います。

私は山岳部入部が1年生の後半になつたこと、山本さんがご家庭の事情で山岳部時代の

後半はあまり山に行かれなくなつたことなどもあり、夏合宿などを除いてはあまり山で一緒することはなかつた。特に思い出されるのは1959年(昭和34年)5月の剣岳早月尾根(春山偵察)で、剣岳頂上にテントを担ぎあげ、残雪期の剣周辺の岩場で遊んだことである。その他の山での思い出はないが、山本さんはヤロー会(昭和36年卒)の中心人物の一員として部室に良く見えられ、大きな声で色々お話を聞かせて頂いた。

私は大学4年の5月に故大建二郎君と爺岳西俣奥壁中央稜で事故を起こし、大町病院で2か月弱入院していくので、就職活動が遅れおり、富士通に入社していく1年先輩の山本さんに相談した。山本さんはただちに一橋先輩の人事課長に会わせてくれ、試験を経て入社することが出来た。就職活動は終盤になつており命の恩人と言える。

富士通入社後は、同じ本社勤務であつたので、食事やビアガーデンなどに良く連れてつて貰い、社内外の友人を多数紹介して頂いた。しかし仕事内容が全く異なつており、山本さんが長野工場に転勤したこともあって、次第に縁遠くなつていった。その後山本さんは本社の主計課長で戻つてきだが、私が沼津工場に転勤したりしてそれ違ひが多くなつた。山本さんは経理の実務に精通しており、頭

の回転が早く富士通経理部門の中心的存在であつたが、通信事業部門に転進して同部門の国内外の事業の推進に鍊腕をふるつた。私が一時、通信機製造を担当する栃木県小山工場に転勤した時には、ご指導を得ることも多くなり、仕事以外にもゴルフコンペ、食事会、飲み会などでご一緒することが多くなつた。当時の私はどうしても仕事中心で、登山は残念ながら疎遠になつていた。

山本さんはご承知の通り、何事においても博識であり、そのこだわりかたも半端ではない。酒は七賢酒造、魚は那珂湊、葱は下仁田葱を車で買いに行くといったこだわりである。東京都内、横浜にも行きつけの居酒屋、割烹などが多数あり、いずれも親しくお付き合いをしていた。蕎麦や焼き肉などもあつたと思うが、寡聞にして知らなかつた。

富士通の関係会社の役員を退任後は、ヒマラヤや剣岳早月尾根などの活躍を聞いていたが、ニペソツ山や大雪山黒岳などにご一緒させていただいた。これから登山を一層ご一緒したく考えていたが、突如の訃報で残念さあまりない。ご冥福をお祈りします。合掌。

尚禎さんと「ヒマラヤ蕎麦」

三森 茂充（昭40年卒）

ネパール・カトマンズのサンセットビューカー・ホテルにそば処「ヒマラヤ蕎麦」がある。

ダウラギリの麓 標高2600mのツクチエ村の赤蕎麦を挽いた戸隠そばや蕎麦コース料理に加え、上品で口当たりの良い地酒チャンを味わえるお薦めのスポットである。

2004年5月、丸山・倉知・山本の先輩方とご一緒したラブチエカンの2週間の山旅を終えた後、私はお酒と蕎麦に目のない山本

さんをここにお連れした。この店のそば職人はシャンカールというタカリー族の若者で、山行へのこだわりもさることながら、山に伴う人とのつながり、行つた先の風景や名物に興味と関心を抱いて即行動に移し、未明に写真付きのメールが来る、というのが私の描いた先輩山本尚禎さんだ。

山行へのこだわりは尚禎さんに負けず私もあるが、日光今市、渡邊佐平商店の「清開」の押し売りには参つた。「今市に行つたら寄つてみろ、俺の名前を出せばよくして

術に、「私にも真似は出来ない」と言わしめた。

こんな話をしながら蕎麦を食べていたが、尚禎さんの真骨頂はこれからである。シャンカールを席に呼んで、ツクチエの蕎麦烟の風景、収穫の時期、地元での食し方など聞き出していた。もう何年も「うずら家」のご主人と会つていないと聞くや、「手紙を書け、帰国したらすぐ戸隠に届けてあげる」と言いだし、待つことしばし、ご主人あてになぜかネパール語の手紙を預かつた。

帰国してすぐに戸隠まで車を飛ばして「うずら家」に行くのは尚禎さんらしく、手紙を届け本物の戸隠そばを食べてきただろう。主人がネパール語の手紙を理解できたかどうか定かではないが、後日私が徳武さんと会つたときに聞いたところ、尚禎さんの事はよく覚えていたと言つていた。

山行へのこだわりもさることながら、山に伴う人とのつながり、行つた先の風景や名物に興味と関心を抱いて即行動に移し、未明に写真付きのメールが来る、というのが私の描いた先輩山本尚禎さんだ。

蕎麦と日本酒へのこだわりは尚禎さんに負けず私もあるが、日光今市、渡邊佐平商店の「清開」の押し売りには参つた。「今市に行つたら寄つてみろ、俺の名前を出せばよくして

くれるよ」が口癖だった。日光白根山の帰りに竹中、蛭川さんたちを連れて行つて義理を果たしたことだ。

尚禎さんとは私がカトマンズに滞在した頃からのお付き合いが深まり、ご一緒したラブチエカンでは、きつい山旅の道中、優しい襞のある物言いをされるお人柄に、何度も助けられた思い出がある。

長野を「庭」に

山本 佑子（尚禎氏夫人）

ショーティは「長野は庭みたいなもの……」

と、よく言つていたからそんなことを書いてほしいとヤロー会の永井さんから依頼されました。

広い長野を「庭」とは、と思いつつあれこれ思い返しますとやはり色々な場所が次々と浮かびやはり長野との縁を強く感じます。

山岳部時代のことは、共に活動された針葉樹会皆様の方が詳しいので省きますが、折にふれ、松本の町のこと、上高地周辺のこととは

「孫たちと遊ぶのが至福の時」とおっしゃつて、福岡への回数券を買って出かけるのを楽しみにされていた。奥さまをはじめ、理解のあるご家族に恵まれた、やさしいおじいさんだつたろうと拝察している。早過ぎたが、好きなことを思い切りやつてきた人生ではなかつたろうか。合掌

聞かされておりました。山には全く縁のなかつた私と初めて一緒に出かけたのも上高地で、散策しながら仲間との合宿のことなど楽しげに話していました。ザック姿の山男達に「寿周遊券」を見られ、冷やかされたのも今では懐かしい思い出です。

富士通入社後は、仕事一筋、一日何時間あつても足りないモーレツぶりでしたから、山のことは考える暇もなかつたでしよう。

昭和47年、初冬、長野工場へ転勤となりました。第三子出産を控えており、家族は春3月に合流することにしました。3カ月余りの

単身生活中に、待望の運転免許を取得、家族を迎えてくれたのです。休日毎に、菅平・山田牧場・志賀高原・戸隠・野尻湖・あんず花盛りの更埴市森・近在の温泉・塩田平から別所温泉……とよく走り回りました。鬼無里の

奥裾花の水芭蕉は当時見つかってばかりで、地元出身の知人の案内で、ぬかるみ道を乳飲み子を背に長靴履きで出かけました。今ではすっかり観光の町に一変した小布施には、鶏の餌を買いにりんご畑の続く道をよく通いました。「庭みたい……」と喩えたことで一番に浮かぶのはこの頃の善光寺平周辺のことでしょうか。松本の信州大の病院にもよく通いましたし、黒四ダムまでも出かけ、犀川沿いの19号線もよく走りました。渓谷沿いの道をぬけ、安曇野平野から眼前に望む北アルプスの山々を説明する表情が目に浮かびます。自ら「無責任なことは出来ないから……」と度々口にしており登山に行くことはありませんでした。一年にも満たない長野の生活でしたが、当時の人脈は生涯続き退職後の長野との縁の礎となりました。

その後、佐久の高見澤電機にも出向。単身赴任でしたので小海線中込駅前の旅館を宿とし、またまた近辺の色々な情報を得、週末に報告するのを楽しみにしていました。浅間山の様々な姿を話す様子も印象に残っています。

会社を退くと、針葉樹会の山行に参加し、ヤロー会の集まりや旅行にも欠かさず出席しておりました。同じ山岳部に籍を置いた気心通じた皆様とは、時を経ても一瞬に昔に戻れ

て、このような時間を待ち望んでいたことが側で手に取るように分かりました。

この頃ヒマラヤに4度行っておりますが、事前の足慣らしに有賀さんと徳本峰越えて上高地へ行つたり、その翌年（2001）には常念岳へ登つています。その記録を抜粋します。

「常念岳・単独。7/3自宅 am4:00 松本am10:20……中略……7/4 am2:30 一ノ沢登

- ① 常念小屋に宿泊予定を変更
「一ノ沢→常念小屋ピストン」
- ④ また動かして体力に自信を持った。
- ⑤ 日の出・日没の写真がいいなと思った。

。櫻高町・田淵行男記念館隣の
物産店の「そばうどん」。
「そばうどん、穂高町でよくそばけ
ぶせなんのが。穂高町 19号線沿い見えた常念山
の型が美しい。



山本さんの山日記から。

山口駐車場～am6:30 常念乗越 am7:30～
am8:00 常念岳～am9:20 常念乗越 am9:50～
一ノ沢登山口駐車場 pm13:00～略。常念岳 2857m、360度の眺望すごい！木曽御岳・北穂・中岳・槍（北鎌尾根）・薬師・雲の平・立山・剣・針ノ木・鹿島槍・白馬・雨飾・火打・妙高・高妻・根子岳・浅間・蓼科・八ヶ岳・富士山・甲斐駒・北岳・木曾駒・（眼下に）蝶・大滝・梓川……略……昭和34年12月以

来42年振り。前回西風強く地吹雪で顔面凍傷……』とあり、「常念小屋に宿泊予定を変更し『一ノ沢→常念小屋ピストン』（+まだ動ける体力に自信を持つた。（○日の出・日没の写真が撮れなかつた……』等々興奮した記録を遺しています。

また登山ではありませんが、中山道のうち長野県内だけを歩くと、ひとり出かけたこともありました（H15.8～9月）。中津川から木曽路を歩き、この時は塩尻で引き上げました。ザックの紐が切れたので「今から帰る」と連絡してきたのです。潔い撤退でした。

毎日パソコンに向かい信毎新聞の記事に目を通し長野に関する情報は自分で確認し、また上高地のライブの映像を楽しんでおりました。

一昨年（2009）、雪形に興味を持ち、雪解けの状態と天候を確かめ一緒に出かけました。安曇野を北上し、五竜の武田菱や白馬の代かき馬・爺ヶ岳の種まき爺さん……と、運転と雪形を探す役と分担、ポイントで車を停め二人で歓声を上げました。その日は木曽福島まで南下、開田高原の民宿泊。木曽御岳の雄姿をカメラに沢山おさめ満足げでした。伊那地方にも、度々出かけましたが、なかも倉知さんと出かけた飯田の東方、静岡県境に近い遠山郷は印象深かつたようで「しら

びそ峠」「下栗」の名がよく出でます。「二
トイモ」の語も。

昨平成22年だけでも、長野時代OB会で小
布施の花見に、八千穂高原の百万本の白樺林
へ写真撮影に、夏には黒姫山へ単独登山にと
出かけております。この時は生憎、登山口近く
で熊に遭い、早々に引き返しましたが。
こうして広い長野県内、何處でも縦横に走
り回つておりました。「庭」という言葉も自然
に出了言葉と、大目に見ていただきたく思
います。

夏には、希望通り長野に参りましょう。山々
に囲まれた地で存分に眺望を楽しみ、そして
安らかにお眠りください。



2000年10月、タンボチエ・キャンプ地で昼食。



2002年、仙丈岳登山。仙流荘でバスを待ちながら。
左から、有賀、仲田、永井、中川、山本。

ポーランドから二つの栄誉

中村 保（昭33年卒）

ポーランドは私にとって初めての国である。親日的で親切な人たちであることは聞いていたが、探検家フェスティバルに招待されこの地を訪れポーランドが大好きな国につになつた。心からの歓待、もてなしを受け、親身になってお世話して頂いた。優しさと、気配り、最上のホスピタリティーに感銘した。

探検家フェスティバル

“The 12th Explorers Festival”

2010年11月19日、ワルシャワの東南に位置するポーランド第二の都会、ウツツ市の大講堂で700人の若い聴衆を前に気分は高揚した。イベントのテーマの一つとして、高校生・大学生に地理の勉強させるためのプログラムに私の「東ヒマラヤの氷河－温暖化の影響」が組み入れられた。素人ながら足で集めた写真、地図を使って東チベットの氷河後退の状況をパワー・ポイントで紹介し

た。興味を示してもらつてほつとした。

ウツツ市は人口65万人、社会主義体制時代に織維産業（ソ連に輸出）で栄えたが、第二次大戦中にドイツにより徹底的に破壊された。空爆をされなかつた古都、クラクフとは対照的である。破壊による荒廃は後遺症として町の建物や雰囲気に残つてゐる。探検家フェスティバルは町興しの企画としてウツツ・トレッキングクラブが主宰し実行しているウツツ市のプロジェクトであるが、ポーランド山岳協会も積極的にサポートしている。

プレゼンターの顔ぶれは多彩であつた。オーストラリアの冒險家カメラマン、エベレスト初登頂のテンジンの息子、エベレスト・ヘリコプター飛行のフランス人、オーストラリア砂漠バイクで横断したポーランド人、2010年8000m峰14座完登のポルトガル人、モーターバイクで世界一周のアメリカ女性、気球でアルプス越えの英国人などである。異色はポーランド青年3人のシベリアからチベット横断の旅だつた。第二次大戦直後、二人のポーランド人がシベリアに流刑になるが、彼らは脱出をしてシベリアからチベットを横断して遂にインドに到達し亡命する。信じがたい過酷で厳しい逃避行だつた。この話



ウツツの大学講堂を埋めた聴衆。

翌11月20日がメイン・イベントである。800人は来ているという若い観客が溢れるコンサートホールで「最後の辺境—チベットのアルプス」をパワー・ポイントで160枚のスライドを使って講演をした。巨大なスクリーンなので見栄えがする。終わって国際探險家賞受賞、名誉会員の認証と、思い出に残る素晴らしい体験だった。かくも大勢の若者が講演を聞いてくれたのは初めてなので感動した。日本では想像もつかないことである。若者だけでなく、ポーランド最強のクライマーの一人、クシストフ・ヴィエリツキやスロバキアのクライマーたちも来てくれた。プレゼンターの顔ぶれは多彩であつた。オーストラリアの冒險家カメラマン、エベレスト初登頂のテンジンの息子、エベレスト・ヘリコプター飛行のフランス人、オーストラリア砂漠バイクで横断したポーランド人、2010年8000m峰14座完登のポルトガル人、モーターバイクで世界一周のアメリカ女性、気球でアルプス越えの英国人などである。異色はポーランド青年3人のシベリアからチベット横断の旅だつた。第二次大戦直後、二人のポーランド人がシベリアに流刑になるが、彼らは脱出をしてシベリアからチベットを横断して遂にインドに到達し亡命する。信じがたい過酷で厳しい逃避行だつた。この話

リス・ボニントン、エドモンド・ヒラリー、ダグ・スコット、クルト・ディーン・ベルガー、リン・ヒル、マルコ・ブレージ、日本人の舟津圭三さんなどである。2010年の受賞者が私を含め4人、スイスの人力飛行士、カラコラム・ヒンズークシュの地図作成のポーランドのイエルジー・ワラさんも受賞した。舟津さんは、アラスカ在住のマッシャー（大櫂使い）です。探検家と呼ばれることもあります。1989年12月から1990年3月にかけて行われた国際隊の史上初の大櫂による南極大陸横断に日本人メンバーとして参加、その功績でその年の朝日スポーツ賞を受賞している。犬ヅリレーサーとしても知られ、現在アラスカのフェアバンクスに在住し、北極アドベンチャーツアーの仕事をもしていると聞く。

ノルゲイはアメリカに留学、ダーリングに住みアイマックス（IMAX）で山岳映画を企画し作製している。映画撮影のプロで、父親の歴史を映像化した部分も入れたエベレストの映画を撮っている。

国際探検家賞

"Explorer International Award 2010"

対象は登山、探検、アドベンチャー、研究の広範な分野にわたる。今までの受賞者はク



名誉会員認証式にて。右がマイヤーさん。

ン・ハントなどがいる。
2回の講演にあたり、たいへん優秀な女性の通訳（英語・ポーランド語）に恵まれたことは幸いだった。

ポーランド登山界

ポーランドの登山界は長い歴史があり、ヒマラヤでは1980年2月にエベレスト冬季初登頂（隊長はザヴァダ）を果たしてその存在を世界にアピールした。山岳会の母体となるトタラ・クラブが1871年に創立され、1903年にポーランド山岳協会の前身となる山岳会ができあがつた。しかし第二次世界大戦後社会主義体制になつて解体され、1956年に自由化とともに復活した。さらに幾度か名称・組織を変え、分散しているクラブを統合する形で1974年に現在のポーランド山岳協会（Polskie Związek Alpinizmu=Polish Mountaineering Association or Federation）に集約、今日に至っている。現在の会長はヤヌス・オニシュキエビツツ氏、政治家である。社会主義時代には政府のスポーツマン、国防大臣も歴任した。

世界のアルパインクラブ誕生の歴史からいって、本家の英國についてイタリアとともにたいへん古い。社会主義体制の時代は組織の維持に苦労したと聞いた。2010年現在、傘

ポーランド山岳会の名誉会員

認証書授与は探検家賞受賞と同時に行われた。存命中の外国人名誉会員は、クリス・ボニントン、ヘルガ・エッガー、ハリッシュ・カペディア、クラバチエル・ワルテル、ナジル・サビル、シユーベルト・ピツトである。故人ではアダムス・カーター、グンター・ディーレンフルト、リカルド・カシン、ジャン・フランコ、エドモンド・ヒラリー、ジョ

下で45のクライミング・クラブ（メンバーは3400人）と22のケービング・クラブ（メンバーは1040人）が活動している。V. クルティカ、K. ヴイエリック、故A. ザヴァダ、J. クルチャップなど著名なクライマーを輩出し、2010年までに三人がヒマラヤ8000m峰14座を完登している。登山文化の伝統はしつかり根付いている。協会はタテルニク（TATERNIKポーランド語でアルピニストの意）という立派な機関誌を発行している。

ポーランドが目標としてきた「冬季初登頂と新ルート開拓」は着実に成果を上げてきた。ネパールの8000m冬季初登頂はポーランド隊が大半を占めている。

1979/80 エベレスト（8848）、1983/84 マナスル（8156）、1984/85 ダウラギリ（8167）、1984/85 チヨー・オユー（8201新ルート）、1985/86 カンチエンジュンガ（8586）、1986/87 アンナブルナ（8091）、1988/90 ローツェ（8501m）である。

1990年にアルパインスタイルで登ったクシストフ・ヴィエリックのダウラギリI峰東壁など、8000mの新ルート開拓も多数多い。初登頂も少なくない。この時代のポーランドからの遠征は協会が強力なメンバーを選



ジョセフ・ニカさん（左）とヤヌス・クルチャップさんと。

抜して送る官製プロジェクト的な色彩が強かつた。が、自由意志で出かける本来のアルピニズムの登り方をするグループもあつた。伝統を踏襲して、近年は新たな挑戦としてカラコラム8000m峰の冬季初登頂を目指している。カラコラム8000m峰は冬季にはまだ登られていない。世界の8000m峰14座のうち9座が冬季に登頂されているが、それら9座は全てネパールかチベット（シヤパンマ）にある。冬季未登の8000m峰は全てカラコラムにある。2010/2011の冬はヨーロッパから下記の三隊が冬の

カラコラム8000m峰に挑む。

- (1) ガツシヤブルムI峰（8080m）：オーストリア・カナダ・スペインの混成チーム（新ルート）
- (2) ガツシヤブルムII峰（8034m）：カザフスタンのD. ウルブコとイタリアのS. モロ
- (3) ブロード・ピーク（8051m）：ポーランド隊「ポーランド・冬のヒマラヤHimalayas 2010—2015計画」の一環として実行

カラコラムはネパール・ヒマラヤと比べると気象条件がより厳しい。気温が約10°C低いし時速150~180kmの烈風が吹く。登頂に成功するには7000m前後のところに待機し、風が少し収まる合間をみて一気に頂上を往復する以外にチャンスはなかろうとポーランドの先鋒クライマーは考えている。

平地が95%以上を占めるポーランドでクライマーは何處で訓練したのだろうかと疑問があつたが、直ぐ氷解した。スロバキアとの国境にある2500m前後のタトラ山脈は格好なグレンデである。5000~6000mの岩壁の冬の登攀は厳しい。無数のルートが開拓されている。英國のスコットランドの山と同様に、ポーランドのクライマーはタトラで鍛えヒマラヤに向かう。日本アルプスや谷川岳

と同じである。

ポーランドへの招聘を推進してくれたヤヌス・マイヤーさん（64歳、アウトドア・登山用具の製造販売会社の共同経営者）もヒマラヤに実績の多い知名度の高い登山家である。ヤヌスさんはクラクフの工科大学冶金科を卒業、1976年ノシヤツク、1986年K2、1988年アンナブルナ南壁、1989年エベレストへ遠征している。私を招聘した直接のきっかけはマイヤーさんの中央チベット・チヤンタン高原踏査行の記録を英文ジャーナルに掲載したことによる。

ポーランドの登山文化は海外遠征という光の当たる面だけでなく、文献や地図作成の分野でも他国の追従を許さない業績が地道に蓄積されている。日本でも知られているイェルジイー・ワラさんのカラコラム・ヒンズークシユのクロニクルおよび地図作成とヤン・キエウコフスキさんの山岳百科大辞典（*WEIKA ENCYKLOPEDIA GORAL ALPINIZMU* 17 x 25cm、全7巻）がその代表である。大辞典の第2巻目はアジア編の山名辞典で800頁におよぶ大書である。日本山岳会、日本山岳協会、山渓の「岩と雪」の紹介もあり、驚いたことに東チベット・雲南・四川のパートでは私が英文ジャーナル Japanese Alpine News 2003 特集号「チベットのアルプス」に

掲載した地図17枚がクレジット入りでそのまま使われている。ここにも英文ジャーナルの価値がうかがえ、辞典編集者の幅広い見識と意欲がみてとれる。これほどの大辞典が出版されている国は他に無いだろう。惜しむらくはポーランド語で書かれているので、他の国では利用されないだろうということである。資料作成という面では旧東欧圏の国の登山家の方が熱心である。

日本の登山界との交流

ここ10年の海外での経験で、世界の山は広い、しかし登山界はどこかで繋がっている」とを実感してきた。ポーランドと日本の登山界との交流は深かつた。過去形で表現したのは、1986年にポーランド山岳協会のミッショングが日本山岳会と交歓するために来日して以来積極的な交流は途絶え四半世紀もの空白が続いていたからである。1960年の京都大学学士山岳会（ACK）がヒンズークシユ、ノシヤツク7492mを初登頂したとき12名のポーランド隊（第二登）と遭遇したのが最初であろう。2010年9月に初登頂50周年を記念して登頂者の岩坪五郎さんと酒井敏明さん他14名がポーランドを訪問し交歓した。學習院の芳賀孝郎さん、贊田統亜さんも参加し、日本山岳会の『山』（201

0・11月）に芳賀さんが寄稿している。

両国の登山家同士の出会い、接点はあった。沖允さんはワルシャワ工科大学に半年ほどポーランド政府から奨学金を得て研究のために滞在し、その間にザヴァダさんと親父を深め、タトラ山群へはザヴァダさんの仲間と一緒に登っている。

1976年、カラコラムのスキヤン・カン

リ7544mを初登頂（永田秀樹、藤大路美興）した学習院隊とポーランドのクルチャップ指揮するK2登山隊とベースキャンプで交歓する。そして34年の歳月を経て登攀隊長だった贊田さんとクルチャップさんはポーランドで再会する。1976年には別の接点もあつた。衰退を続ける日本の登山界で現役クラマーとして頑張っている坂下直枝さんから届いたメールを以下引用させて頂く。

「中村さんのご報告のなかに懐かしい名前が大勢登場しましたが、ヤヌス・マイヤーさんの名前がてきて驚きました。1976年の夏、ジャヌー北壁を初登攀したくて3人でアフガニスタン・ワハン谷のノシヤツク峰を含めた7000m峰をアルパインスタイルで登ろうとネペールから転進しました。ベース入りした翌々日6700m峰を登攀中のビバークで高山病にかかり、ベースキャンプで急激に悪化し、ポーランド隊のヤ

ヌス・マイヤーさんとドクター、メンバーの
介抱で助かりました。命の恩人です。

お礼にソニーの小型レコーダーでモーツア
ルトとバッハのテープを流してクラシック・
コンサートをした後、レコーダーなどをボーランド隊に寄贈しました。ヤヌスさんから友好の印として大振りのナイフを頂戴しました。小柄で黒いひげ、顔のふつくらした人で話は魅力的で優しい男でした。当時はクラクフの工場に勤めていると聞きましたが、登山スポーツ用品の会社を経営しているとは知りませんでした。あれから35年経ちます。お会いしたいものです。連絡先を教えて頂ければ幸いです。

ザヴァアダさんには、小生が1980年に冬のアンナブルナⅠ峰に単独で挑戦したときにいろいろなアドバイスを頂きました。当時は瘦身で大学教授のような風貌でした。訃報は残念です。世界は広いはずですが、登山界はどこかで世界中のいろいろな登山家と繋がっていますね。リポートを読んで改めて感じました

1986年夏にポーランド大使館の好意で日本山岳会とポーランドの交歓登山が実現し、アンジエイ・ザヴァアダ（当時57歳）を団長とする7名の選りすぐりの登山家が来日した。エベレスト冬季初登頂のレシェック・チ

ヒ、クリストフ・ヴィエリツキもメンバーだった。日本山岳会は今西会長以下総力で迎え入れ、読売新聞の協力、産業界の支援も受け交流の成果を挙げた。登山は富士山と上高地で行われた。ザヴァアダさんは永田秀樹さんと穂高に登り、残りは屏風岩でフリークライミングを楽しんだ。

シンポジウムの席ではザヴァアダさんは150年におよんだ国々の分割と第二次大戦後の困難な再建の歴史、ポーランドのアルピニズムについて説明し、自分たちのコンプレックスとしてポーランド人は8000m峰を初登頂していない事実をあげた。「それで、なるべく国際的に効果のある登頂を狙おうと決めました。必ず新しいことをやること、他の国が辿ったルートには行かない」と語りポーランドの目指すべき道筋を示唆した。彼の発想はその後のポーランド隊の記録で実証されている。

が、悲しいことにザヴァアダさんは10年前に臓癌で他界しました。

松田雄一さんによると、ポーランド側はお世話をなつた返礼に次はポーランドで交流登山をしたいから是非きて欲しいと日本山岳会に要望したが実現しなかつた。ポーランドのクライマーの実力に太刀打ちできるメンバーは集まらないだろうと尻込みしてしまつたらしい。その後の交流は個人ベースの登攀で2

001年に山野井泰史とクルティカがカラコラムのビアチエラヒ・タワー（標高6000m弱）をペアで登つた記録がある他は寡聞にして知らない。

初冬のポーランドは陰鬱で底冷えがする。11月25日、小雪舞うワルシャワ空港を飛び立つて次の目的地スペインのバルセロナに飛んだ。直行使で3時間、太陽の国は快晴だった。

われわれの現役時代

原 博貞（昭41年卒）

昭和41年卒の我々は「穂橋会」（スイキョウ）と称しております。一部先輩は我が会をドウティ会（道程？）と呼びますが、そのような下品な会名ではありません。

昭和37年の新人歓迎会では確か13名いたと記憶しておりますが秋までに6名に収束し、以降卒業まで変わりませんでした。人数という面で見ますと、我々は丁度、部員減少が始まる境目にいたと言えるでしょう。我々

以降、部員数は減少を続けます。と言つても、夏の定着合宿ともなると、炊事用には大きなプロパン・ボンベを担いでいったものです。

世代で見ると、植木等演じる平均君が集団に帰属するサラリーマンを揶揄し、「無責任」を標榜して、個人至上を調子よく主張する時代で、我々はまさしく、その申し子だったと言えます。

1、2年では深刻な遭難が続き、白井さん、蛭川さん、小島さんの各リーダーは建直しの為、苦慮されていました。とりあえず、岩登り等の危険度の高い登攀は抑制気味で、地道な登攀が主体だったように記憶しています。我々も先の方向性が見えず、不安定な気分で過ごす日々でした。とは言え、我々にとっての大リーダーである小島さんは、強力なリーダーシップを發揮し岩登りにこそ控えめでした。冬山に関しては大いに野心的で苛酷とも言える縦走を実施し、徹底的にしごいてくれました。体力と気力の向上を目指す、このしごきは、我々に深い秘めたる尊敬の念と口達者な反発をもたらしましたが、卒業と共に尊敬の念のみが残りました。

我々6名は平均化されたメンバーではありましたが、結束のとれたチームではありませんでした。例えば、3年夏の涸沢合宿で、高崎と私は居住するテントに保管されていた、差入の

チヨコレートを「つそり盗み食いしましたが、バレるに決まつており、合宿の最終日、

小島リーダーは我々6人を前に並べて大かみなり、大説教を行いました。私と高崎は犯人ですから小さくなっていますが、他の4人は何の事かさっぱり判りません、さぞや猛烈に抗議するのでは、と横目で見ると、皆、おとなしく下を向いて説教を聞いています。「連

帯責任を受け入れてくれるとは、ああ、持つべきものは仲間だ」と痛感したものです。

各メンバーの紹介を物故会員から行います。

平川紀男は昭和47年6月、就職した富士フィルムの山岳部員2名と前穂北尾根を登り、A沢からの下山中、踏換え点下の大滝のシュルンドに落ち、全員死亡しました。

在学中は家庭の事情で冬山と岩登りは禁止されおり「これでは山岳部員と言えないよ」と嘆いていましたが、卒業の3月の白馬主稜行きから何があったか積極的な登攀をするようになります。ある正月には中島さんと鹿島槍東尾根に向かい下山予定日を過ぎても帰還せず、大騒ぎになつた事もあります。まあ、無事だったのですが「少しセーブした方が良いのでは」と注意しても「まだまだ余裕だよ。俺はしぶといんだ」と嘯いていました。危惧

があたり悲しい結果となり、あの収容作業は辛い思い出です。

酔うとペールギュントの「ソルベーグの歌」を少々調子を外して歌うのですがこれがちょっと味があり宴席を盛り上げたもので

す。

次は石田信隆です。

彼は麻布中学からの山岳部員で飯焼きには絶対の自信を持つており「どんな凹鍋でもガンタ飯にはしない」と豪語していました。同じく料理自慢の私と組んで4年になつてもテント入り口の炊事スペースを占領し下級生を奥に追いやつたものです。

彼のエピソードは何と言つても一の倉沢衝立岩の大ダイブでしょう。

第2ハングを越えたフリークライムのピッチでトップの彼はハーケンが抜け、真っ逆様の空中ダイブ。彼の言によれば「衝立のスラブがグングン大きくなるんだ。その時俺は肩にかけた三つ道具が落ちないようにシッカリ抑えていた」んだそうです。しかし、その時のパートナー池知の強力な確保で無事生還しました。

残念な事に彼は平成6年、ガンの為、早逝しました。平川の慰靈の為、毎年のように徳沢園に行った為、今でも徳沢の人達は石田の事を良く憶えています。

ここからは生存者。

我等のリーダー高崎俊平です。

彼は新宿高校の山岳部のリーダーであり、高校時代に滝谷を登っていました。「片桐」の

2尺4寸のザックをピチッと四角にパックし

て、未経験者の我々を羨ましがらせていました。3年になって我々がクライミングを始めた時は、彼も共に積極的に登っていたのですが、学年の終わりに、リーダーとして決定する

と、自身のクライムは極力抑え、リーダーとしての責務を優先するようになりました。もとより技術的には一番優れており、私は「リーダーがアツタックしても良いじゃないか。いつでもバツクアップするよ」と言つていきましたが、彼は「いいんだ」と応じませんでした。まあ、私のようないい加減なのが勝手な事をするのを抑えねばなりませんから前線には立ち辛かったのでしょうか。責任は重いものでした。気の毒な事をしました。

次は池知昭洋。

彼ほどストイックな人間はちょっといないでしょう。例えば下山中、沢にぶつかります。しかし、ちょっと下を見ると、コンクリートの橋が見えます。しかし上を見ると、すこし登れば怪しげな吊り橋が見えます。彼は迷わず上の吊り橋を選びます。常に厳しい方の選択肢を選ぶのです。私は3年の時、彼と組む

のが多かつたのですが、まったく、えー、疲れました。しかし間違いなく豪の者です。

衝立の石田の墜落の際も、見事な制動で止めたのですが、それは顔面制動を伴うものでした。半面がズリ向け、お岩なみの凄い顔になりましたが、それでも止めました。そして

宙吊りの石田を、別のザイルにリングを作り、心配と尊敬の目で見守っています。今でもで

すよ。

その後の彼の人生は「常に厳しい道を選ぶ」という路線を貫いています。我々は、それを心配と尊敬の目で見守っています。今でもで

すよ。

次は佐藤久（久尚）ちゃん。

体重・体力ナンバーワン。走らせれば一番の鈍足でしたが、ザックを背負つて下山の時は、速い・速い。ものすごい自信家で「俺は絶対に墜ちない」と豪語していました。

4年になってのクライムは、私はほとんど久ちゃんと組んで行いましたが、「前穂のDフェース」「北岳バットレスのCガリー下段の滝から中央稜」「同じDガリリーの滝から4尾根フランケと周辺の壁」2度の「一の倉沢衝立岩」等、当時としては頑張ったのですが、確かに墜ちません。決してスマートなクライムでは無いのですが危ない！という瞬間の電光石火の反応が素晴らしい。1回目の「衝立」はルートを間違え、とんでもない所に入り込

み、彼がトップのピッチで3度は「アツ」と思いましたが、全てOK。彼の弱点は「弁皮」と「次郎」で、冬山ではいつもこの話題で盛り上がりました。

最後は私、原です。

先述の如く、1、2年は遭難の為、岩登りは自粛で、3年の6月になって初めて我々だけで奥又の合宿を行い、岩登りに取り憑かれました。その時の文集を今も持っていますが、その幼い感動と、恥ずかしいまでの燃え上がりにてれくさい思いをします。そして、その勢いを借り、私と池知は、なんと甘利先輩を訪ねたのです。そして「僕達はアルプスの3大北壁を登りたいのです」と言つてしましました。甘利さんは驚いたでしようね、こいつらを、このまま放置したら何をやらかすか判らない、と思ったのでしょうか、いきなり「ワハハ」と笑いました。「あんな壁は登れて当たり前、登れなかつたら恥さらしだ。やめとけ、やめとけ」ですと。二人ともすっかり毒氣を抜かれ、ご馳走になつてスゴスゴと引き上げました。その2カ月後、日本人によるアルプスの北壁登攀が始まり、特に高田光政の遭難を伴うアイガー北壁が注目を浴びました。遭難を伴つただけに、マスクのトーンも厳しく、浦松さんを代表とする金持良識派登山者からの「カミカゼ登攀」という批判に対する

吉沢先輩の毅然たる「あれは見事なクライムだ！」という反論に我々は拍手喝采したものでした。時代というものでしょう。

この夏は、合宿終了後も、家に帰らず、涸沢に戻り池知と9月トップまで暮らし、滝谷、屏風、奥又を登りました。同期の仲間達も三々五々、現れ、登っていました。

高崎リーダーとなつての我々のコンセプトは「小島さんの縦走中心の雪山に、バリエーション・ルートを加えよう」というものでした。

3年の3月の春合宿は、高崎リーダーのもとに本隊は明神5峰からボーラーで全員、奥穂に登頂する、我々は西穂稜線を縦走し、明神で本隊と合流し、明神東面のリツジ、4峰の東稜、5峰の東北稜などを登るという、までは手堅いものでした。天候はあまり良くはありませんでしたが、堅実な計画で成功しました。

最後の合宿となる4年の冬山は野心的な計画でした。縦走とバリエーションの組み合わせに分散合宿を取り入れたのでした。

①本隊：涸沢岳西稜から北穂に向かい、滝谷1尾根を登り、槍へ縦走。高崎リーダーで1尾根は久ちやんと原がアタック。
②クリヤ谷から笠に登り双六を経て槍へ、

その後硫黄尾根を下る。池知リーダー。

③表銀座を槍に縦走する。岡田リーダー。

高崎は、海外遠征をどこかに思っていたのか知れませんが、私は「より自由に、より楽しく」くらいに考えていました。このプランは小島さん、倉知さんの猛反対にありました。最終的には、不参加者が出て、③を取り下げ、①と②のみにする事で了承を得ましたが、後で反省すると無理な計画で反対されて当然でした。

クリスマス寒波と命名された大寒波による連日の悪天候の中で決行された計画の結果は。

②のパーティは、まずまずの成功でした。そして①の本隊は、西稜の蒲田富士の先で雪庇を踏み抜いた私がチビ谷側に大転落し、そこでの1日のロスがわずかに1日あつた好天を利用出来ない結果となり無念の滝谷断念となりました。絶対「墜ちない」久ちゃんとのコンビだったので自信があったのですが、仕方がありません皆さん、特に久ちゃんには申し訳ない事になりました。現場は、後で判明したのですが、雪庇踏抜き事故の名所で、かなりの死者が出ています。よくぞ助かつたとも言えます。これが最後の合宿だつただけに、上高地からの下りは本当にやるせない思い出の歩行でした。

以上が「私の現役時代」です。

最後に。平川のレリーフは奥又の中畠新道

取り付きの右側、本谷寄りにあります。

「飘々と去つて行つた君の思い出の為に」、中島さんの紹介で芸大山岳部の方がレリーフを作り、嵌めこんでくれました。通りがかりではちょっと見えませんが、7月になると雪の下から現れます。宜しければ一度訪ねてやって下さい。

クーンブ・ヒマールトレッキング報告 (カラ・パタール、ゴーキョ・ピーク登頂)

中村 雅明 (昭43年卒)

出発まで

年明けの1月末に三頭山へ同行した佐藤久尚さん(昭41卒)がカラ・パタール行を表明されました。佐藤さんは既にネバールでのトレッキングを2回経験されていました。昨年、エヴェレスト街道トレッキングに参加した岡田健志さん(昭42卒)は、春頃までゴーキョ行を希望されていましたが、カラ・パタール

行に参加することになり、佐藤さんをリーダーとする前期高齢者3人チームとなりました。

それから出発までは経験豊富な佐藤さんの独壇場でした。7月初には日程、コース案が作成され、それに基づいて、現地エージェントの選定、見積もり依頼・査定、往復の飛行機の手配（予約）、カトマンズのホテルの予約など一切の手配が佐藤さんの手で7月末に完了しました。正に佐藤さん手作りのトレッキングとなりました。3人で打ち合わせしたのは、8月末の1回のみ。事前の合同山行も行わず、個人で行ったのはビザの取得、ダイアモックスの入手だけでした。私は高山病対策として、代々木の三浦ベースキャンプで健康診断と高地での呼吸訓練、歩行訓練を併せて3回受けました。

10月21日（木） 成田からカトマンズへ
11時発のキャセイ便で香港経由22:15カトマンズ着。ホテルの出迎え車でカトマンズの中心タメル地区のチベット・ゲストハウスに入りました。
10月22日（金） カトマンズ
宿舎から徒歩で現地エージェントのコスマトレック＆トラベル社に赴き、代表の大津さんと打ち合わせしました。明日のルクラ飛行

便は6:15 分発のタラエアーが予約されていることを確認するとともに、ルクラからの帰路便は1日遅らせて11月7日に変更しました。その後ガイドが紹介されましたが、当初予定していたガイドが前夜に発熱でダウンしたため、急遽交代したことでの、本名Prem Bahadur Bista（愛称：ペルマ）という29歳の青年が紹介されました。彼はマカルーの近くの村の出身で、本業はコツクとの由。日本語と英語が話せ、カラ・パタールには10回行つたことがあるということなのでその場は安心しましたが、実際は日本語も英語も不完全で後で意志疎通に苦労しました。

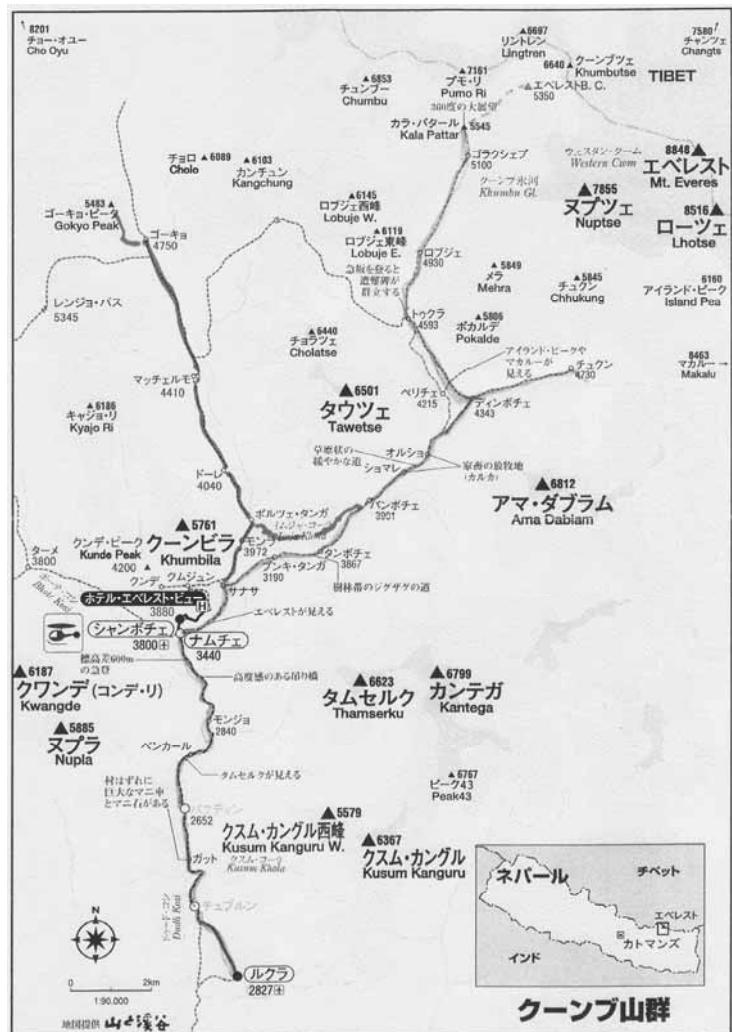
午後は、郊外の古都パタンの観光を楽しみました。行きはタクシーで200ルピー、帰りはバスで1人10ルピー。バスの安さに驚きましたが、バス停が不明。どこで降りるのかわかりません。カトマンズの地理に明るい佐藤さんのお陰でホテルに近いところで下車できました。夕食はホテルから近い日本料理の店『おふくろの味』で、和食を食べ、明日から続く現地食に備えました。

10月23日（土） カトマンズ→ルクラからパクデインへ
トレッキング初日。未だ夜も明けぬ5:00ホテル発で国内空港へ。ルクラ Lukla （出発するまでが大変。6:15発の筈が何時に出発する

のか判りません。電光掲示盤無、放送無。係員の呼びかけが突然やってきます。結局、出発したのは8:10、40分でルクラ（2840m）に到着。機内からは雪をまとったヒマラヤの高峰が次々に展望できましたが、残念ながらヒマラヤ初心者なので山名が判りません。ルクラのロッジでボーター2人と顔合わせしました。Dhon Kumar Rai（愛称：トン）18歳、Aiom Tamang（愛称：ジエル 20歳）の若者2人です。遅い朝食を摂り、10:30 ルクラ発。我々3人+ガイド1名+ボーター2名計6人組のトレッキングが始まりました。トンコが佐藤さんと私のザック2つを、ジエルが岡田さんのザックを背負いました。ザック1つの重さは12～13kgほどです。自分達はサブザックに貴重品、カメラ、飲み物、上着などを詰めただけの軽装でまさに大名道中です。高山病対策のダイアモックスはルクラから服用することにしました。初日はドウード・コシに向かつて下つしていくので楽な行程です。この街道はネパール・ヒマラヤトレッキングコースのなかで1、2を争う人気コースなので、行く人、帰る人、ヤク、ゾンキヨ（ヤクと牛の交配家畜）が引きも切らず大変な賑わいです。チュブルン Chheplung、ガツム Ghat を経由して14:00 パクデイン Phakding (1600m) 着。

10月24日（日）パクデインからナムチエ・バザールへ

トレッキング2日目。本日はナムチエ・バザール NamcheBazar まで標高差800m、約6時間の行程。ドウード・コシに架かるワイヤー製の立派な橋を4つ渡るまでは川沿いに歩き、そこからナムチエまで樹林帯を600mひたすら登りました。トクト Toktok の少し先でタムセリク (6618m)、エヴェレスト展望台でエヴェレスト (8848m) を初めてこの目で見て感激しました。ナムチエ・バザールはクーンブ地方最大の村だけあってロッジ、商店が立ち並んでいます。洒落たナムチエ・ベーカリーでおいしいパン&コー



0mひたすら登りました。トクト Toktok の少し先でタムセリク (6618m)、エヴェレスト展望台でエヴェレスト (8848m) を初めてこの目で見て感激しました。ナムチエ・バザールはクーンブ地方最大の村だけあってロッジ、商店が立ち並んでいます。洒落たナムチエ・ベーカリーでおいしいパン&コー

お茶の後、ホテルの前面の山腹にある中島寛さん（昭36卒）のレリーフを訪問し、線香をあげ山讚賦を歌いました。場所といい、レリーフに刻まれている「やみがたきおもい：…こに」の言葉といい、中島寛さんを偲ぶ

ヒーの昼食。

ロツジに落ち着いた後、夕食までの間は3人それぞれナムチエ散策。佐藤さんはナムチエの西端の山腹のゴンパ（僧院）へ、岡田さんは郵便局へ、私はナムチエ村の上部へ行きました。残念ながらガスが出て山は望めず明日にお預けです。

10月25日（月）ナムチエ・バザールから

シャンボチエ～クムジュン往復

トレッキング3日目。朝食前に昨日見えたかったボテ・コシ（川）の谷を隔てて聳えるコンデ・リ連山の写真を撮りました。今日は高度順応のため、ナムチエに連泊（停滞）し、日帰りミニ・トレッキングをしました。まずシャンボチエ Syangboche のホテル・エヴェレスト・ビューリーに行き、テラスでお茶を飲みながら、エヴェレスト、ヌプツエ (7879m)、ローツエ (8511m) 見物。これから向かうタンボチエ台地も良く見えます。アマ・ダブラム (6856m) も空高く聳えます。素晴らしい展望を堪能しながら飲むコーヒーの味は格別です。

のに相応しいレリーフです。ホテルに戻つてクムジュン Khunjung (3780 m) に下りました。クムジュンは日当たりの良い村で、各家の屋根の色も薄緑に統一されています。昼食後、ヒラリー・スクールを見学。お祭り(ティハール)で休校のため、人影がなく残念でした。帰路はスクール・シャンボチエ飛行場(ゴンペ)で、14:15 ナムチエ着。

10月26日 (火) ナムチエ・バザールからデイボチエへトレッキング4日目。7:18 ナムチエ・バザールに別れを告げ、タンボチエ Tengboche を目指しました。ナムチエの村落の中の坂道を登り、昨日辿ったホテル・エヴェレスト・ビューエの分岐から右の道を進むと山腹にほぼ水平な道が続きます。ドウード・コシが右下深く見下ろせ、タムセリク、カンテガ (6783 m)、アマ・ダブラム (6856 m) が眼前に広がります。ローツエ、エヴェレストが見えるとさらに気分が高揚します。この道には昨日シャンボチエの丘で見たリンドウ科の仲間が沢山咲いていました。岡田さんと一緒に撮りました。群落で咲く薄紫&白い花が多いですが、時折、1~2輪でひつそり咲く濃い紫の花が見つかります(付記2参照)。これから先の街道でもこれらの花を見かけることになります。暫く歩くとサナサ

Sanasa の三叉路に出ました。サナサのロッジ前からどんどん下り、ドゥード・コシまで下りたところがブンキ・タンガ Phunki Thanga。川辺のロッジで昼食。ここから 600 m の登り 2 時間、13:20 タンボチエ Tengboche (3860 m) 着。ここには立派なゴンペ(僧院)がありましたが、生憎、読経の時間に重なり見学はかないませんでした。当初はここで泊る予定でしたが、時刻が早いので、デイボチエ Deboche まで下ることにしました。20 分の下りでデイボチエ (3820 m) 着。

10月27日 (水) デイボチエからデインボチエへトレッキング5日目。7:37 デイボチエ出発。まだ日陰の川沿いの道を暫く歩いた後、対岸の日当たりの良い道を登りました。右手にタムセリク、アマ・ダブラムが、背後にコンデ・リを見ながらの登りです。パンボチエ Pangboche の先は草原状の緩やかな道が続きます。ショマレ Shomare、オルショ Orsho のカルカ(家畜の放牧地)は石積みの家が良く調和し、絵本の中の風景の様で心和みました。オルショから標高差 350 m の登りで 14:15 デインボチエ (4410 m) 着。

この日初めて 4000 m を越え、高度の影響が出るのではと心配しましたが、誰も影響なく安心しました。まだ陽が高いので、宿の

前の水場で石鹼を使って顔を洗いさっぱりしました。岡田さんは下痢のため食欲なし。

10月28日 (木) デインボチエからチュクン往復

トレッキング6日目。今日は高度順応のためチュクン Chhukhung を往復しました。

このコースはエヴェレスト街道から外れていたため、街道の喧騒がなく静かでした。イムジャ・コーラ沿いの道はなだらかで歩きやすく、河原の佇まいも日本庭園の趣きがあり、山岳景観も素晴らしい、高度順応にはもってこいのコースでした。

デインボチエからチュクン (4730 m) まで 2 時間。右手(南)にアマ・ダ布拉ムが大きく見えます。今までと全く違った角度から見るので別の山の様です。左手(北)のローツエからヌプツエへ連なる大岩壁帯に圧倒されます。正面にはアイランド・ピーク (6189 m) が望めます。チュクンでは、カン・レヤムウ Kangleymu (6340 m) の美しいヒマラヤ壁に目を奪われました。チュクンからアイランド・ピーク・トレックを 4859 m 地点まで登つて引き返しました。15:26 デインボチエ着。

この日初めて 4000 m を越え、高度の影響が出るのではと心配しましたが、誰も影響なく安心しました。まだ陽が高いので、宿の

ラヘ

トレッキング7日目。今日はドウグラ



2010年11月4日、ゴーキョ・ピーク山頂。
左から、中村、岡田、佐藤。

Dughlaまでの短い行程です。いつもより遅い7:58ロッジ出発。ディンボチエからいきなり山腹のジグザグ道を登り段丘に出ました。そこからは景色の良い歩きやすい尾根道をゆっくり登りました。ドゥグラ近くで眼前の山腹にチョラ・パスへ続く道と谷間にブルーのチョラ湖が見えました。10:40 ドゥグラ（4620m）着。昼食後、高度順応のため、クーンブ氷河末端のモレーン急坂を登りトウクラン・パス（4830m）で小憩。峠からの景色は圧巻でした。右手にはタウツェ（6495m）、チョラツェ（6335m）が、左手に

はお馴染みのタムセリク、カンテガが聳えています。カンテガの右奥に真っ白い雪を纏った双耳峰が目をひきます。峠からの少し先のクーンブ氷河が良く見える地点で引き返すことにしました。氷河の左手奥にブモ・リ（7145m）が大きく見え、その下に小さくカラ・パタール（5545m）が、右手奥にはヌプツェが見えました。「いよいよやつて来たなあ」の感を強くしました。14:30 ドゥグラ着。今夜の宿泊客は多く、夕食時に食堂は大混雑。これから先の宿の確保が心配事になりました。岡田さんは今晩も下痢がひどく食欲なし。

10月30日（土） ドゥグラからロブチエヘ

トレッキング8日目。今日もロブチエ Lobucheまでの樂な行程です。いつもより遅い8:12 ロッジ出発。昨日登ったトウクラ・パスまで朝の一登り。峠の少し先でクーンブ氷河を横切り、右岸の道を前方にブモ・リを眺めながらゆっくり登りました。10:30 ロブチエ（4910m）着。先行したポーターがロッジを2泊予約済みでした。今日も高度順応のため、ロブチエ East（6090m）の5193m地点まで往復しました。これで初めて5000mを越えましたが、全員高山病の心配はありませんでした。

14:20 ロッジに戻った後、ゴラクシェプ

GorakShepの宿の確保が心配だったためガイドをペリチエ Pheriecまで下らせ、そこから電話で予約させようとしましたが、戻ってきたガイドの答えは「ロッジは満杯で泊まれない」とのこと。前途に暗雲が立ち込めました。夕食後、翌日以降の行動を相談しました。明日は当初予定したゴラクシェプ入りは断念する。エヴェレストBC訪問は諦める。明後日に予定したカラ・パタール登頂を明日行う。岡田さんは体調不良なのでロッジで休養し、佐藤さん、中村が早朝ロブチエを出発し、カラ・パタールを往復する。明後日、チョラ・バス越えでゴーキョ Gokyoに下るコースに向かう。途中、ゾンラ Dzongkhlaで一泊。岡田さんの体調が戻らなければガイドのジェルとナムチエ・バザールに向けて下山する。以上の通り行動予定を大幅に変更しました。明日の天気と岡田さんの体調が心配でした。

10月31日（日） ロブチエからカラ・パター

ル往復（登頂）

トレッキング9日目。今日は往復7時間、標高差600mのアルバイトなので、5:45にお茶だけ飲んで6:00に出発予定でしたが、朝、食堂に行つても誰も起きていません。お茶抜きでの出発を覚悟しましたが、6時近くに佐藤さんが食堂に寝ていた若い従業員をたき起してお茶を用意させ、10分遅れの

6:10 ガイドと3人で出発しました。天気は残念ながら上空はどんよりした曇りで晴れ間がありません。今まで午前中は快晴が続いていたので何たることと嘆きました。最初は荒涼としたクーンブ氷河脇の道を緩やかに登り、ゴラクシェープの手前の岩屑の小山を登るとゴラクシェープが見えてきました。エヴェレストBCも見えました。romo・リの頂上から手前に派生した雪稜が黒褐色の丘陵に変わったところがカラ・パタールです。ゴラクシェープを見下ろす小山から眺めると高く見えません。佐藤さんの「何だ。ちんけなピークだなあ」の一聲に同感。ピークと言うより展望台です。8:30 ゴラクシェープ (5140m) 着。ロツジでガーリック・スープを飲んで小憩。このロツジでショッキングな事が判明しました。佐藤さんが空き部屋があるか尋ねたところ、「有る」との事。昨日のガイドの情報が不正確でした。佐藤さんがガイドに確認するとガイドは別のロツジの方を指さし、「あのロツジに電話したところ満杯と言われた」と答えていましたが、佐藤さんはガイドもポーターも樂をしたいために嘘をついたと、あくまで疑っている様子でした。

8:50 ロツジを出発し。カラ・パタールの登りにかかりました。標高差400m、山腹をほぼ直登する苦しい登行です。天気はますます

す悪くなり、登り始めて直ぐ雪が降り始めました。気温も下がってきました。三浦ベースキャンプで習った呼吸法を励行しながらゆっくり登りました。佐藤さんは時折くる足の痺れを直しながらの苦しい登行です。それでも途中3回の休みで11:00に頂上 (5545m) 着。視界はゼロ、周囲の山は全く見えません。カラ・パタールから見るエヴェレストの大展望が得られず残念至極。雪は降りやまず、寒いので羊かんを食し写真を撮った後、11:15 下山開始。1時間弱でゴラクシェープに下り、昼食後ロブチエに向かい、14:55 ロブチエ着。ロツジ周辺に雪がうつすら積もって寒々としていました。

夕刻、チョラ・バス越えに関して。ガイドから「チョラ・バスの手前のゾンラはロツジが1軒しかなく、客が一杯で泊まれない」との話がありました。ポーターをゾンラに派遣して確めたとの事でした。降雪と真偽(チョラ・バスに行きたくないので嘘)を確かめる術もないことからチョラ・バス越えを誂め、大迂回路となりますがロブチエからペリチエ、パンボチエ、ポルツェ Phortse、ドーレ Dole を経てゴーキョへ行くことにしました。なお、岡田さんは明日の宿泊地のパンボチエでの体調次第でゴーキョに向かうか、ナムチエに下山するか判断することにしました。

このロブチエが今回のトレッキングの最高度宿泊地となりました。5000m近いので夜は冷え夏用のシュラフでは寒いので毛布2枚(通常は1枚)でしのぎました。

11月1日(月) ロブチエからパンボチエへトレッキング 10日目。6:00 起床し、外を見てびっくり。一面の雪景色です。積雪約10cm。まだ少し雪が降っています。朝食が終わる頃、雪が止み、陽が差してきました。結局、昨日のカラ・パタールは最悪の日に登った訳です。チョラ・バス (5420m) 越えも完全に諦め、7:38 パンボチエを目指しました。ゴーキヨ・ピーク (5360m) が新しい目標です。ロツジの前とロツジから少し歩いた(アモーリが良く見える)所で全員の集合写真を撮りました。ポーターの2人は常に自分達より先行するので仲々全員揃いません。全員写真はここで撮った2枚だけです。

ドウグラを経由してペリチエまでは雪を踏みしめての下りです。まるで天気の良い日の春山の下山の趣でした。下痢が止まらない岡田さんがペリチエのヒマラヤ救助協会の診療所(欧米人医師がシーズン中のみ不定期で駐在)で女医さんの診断を受け、強力な下痢薬をもらいました。脈拍、動脈血中の酸素飽和濃度 SpO₂も正常で高山病の心配はないとの事でした。ペリチエからペリチエ峠まで登り

11月4日、ゴーキョ・ピークから。左からエベレスト、ローツェ、右奥に三角形のマカルーが遠望できる。写真提供・岡田



小憩。雪は少し消え残っている程度になりました。峠の背後に山越に真っ白なタウツェが見え印象的でした。峠から少し下り、行きに歩いた街道に合流し、暫く歩いて14:30パンボチエ着(3930m)。今日は一挙に1000m下りました。夜の寒さが大分違いました。

11月2日(火) パンボチエからドーレへ
トレッキング 11日目。今日はポルチエを経由してドーレまでの予定。昨日もらった下痢薬が利いたのか岡田さんの体調が好転し全員でゴーキョに向かうことになり喜びました、7:20ロツジ出発。30分ほど下った所で吊り橋に出で道を間違えたことに気が付きました。

ポルチエへ行く道はイムジヤコーラ右岸の山腹を巻く道が正しいのに、ガイドは吊り橋を渡つてタンボツエの方へ我々を連れて行こうとしたのでした(邪推するとガイドはゴーキョに行きたくないのでわざと道を間違えて我々を元来た道の方に誘導しようとしたかも知れない)。引き返すことも考えましたが、ガイドが通りかかった年配のシェルパに聞いたところ吊り橋から直登するヤク道を登れば正規のルートに出られることが判り、ヤク道を辿ることにしました。かすかな踏み跡を探しながら約1時間の急登でようやく正規のルートに到達しました。岡田さんがガイドに「これ、トレッキングでなくクライミング」と

皮肉を浴びせました。この登りでポーターのジエルが大きく後れ、体調が悪いのも気懸りでした。ポルチエまではタンボチエを正面に見ながら山の中腹をトラバースして行きます。振り返るとアマ・ダブラムが大きく聳えています。正面にはカントガ、コンデ・リも望め、写真を撮りながら進みました。ポルチエは山の中腹の台地に広がった村で畑が多く豊かな感じです。畑で働いている農婦の姿は何とも牧歌的な光景でした。ポルチエを通り過ぎてドウード・コシまで下った川畔のロツジで小憩後、対岸のポルチエ・タンガ Phortse Thanga からシヤクナゲ林の中をドーレに向かつて登りました。暫く登るとチヨー・オユー(8201m)が樹間に姿を現しました。秀麗な山容です。トンバ Tongba を過ぎたあたりで、中腹に白雲を纏つたカントガ、タムセリクの勇姿に見惚れました。15:00 ドーレ(4110m)着。ロツジの部屋の窓から屋根越しにカントガ、タムセリクを撮影しました。

11月3日(水) ドーレからゴーキョへ

トレッキング 12日目。今日はゴーキョ入りの日です。7:44ロツジ出発。すぐ近くのロツジに立ち寄り、佐藤さんがカトマンズのコスマトレック社に電話し、ルクラからの帰りの飛行機を1日遅らす交渉をし、OKを得ました。これで下山の行程が楽になりました。急

斜面を登った後は山腹をトラバースしながら支尾根を横切りながら徐々に高度を上げて行きます。道脇には他では見られないワタスゲに似た白い花が群生して目を樂しませてくれました。行き交うトレッカーも疎らで、エヴェレスト街道に比べて静かで好ましいものでした。

ルザ Luza の手前で、チョー・オユー、ゴジュンバ・カン (7806m)、ギヤチュン・カン (7922m) を背にした岡田さんを撮影しました。ルザで小憩。そこからマツチエルモ Machhruma は直ぐでした。谷奥に高く聳えるキッジョ・リ (6186m) の尖峰が印象的でした。マツチエルモで昼食後、歩き始めて直ぐにガイドからポーターのジエルが体調悪いので、ここから下山させたい旨の要請がありました。昨日、体調を崩し、薬を飲んでも治らなかつた様です。止む無くジエルの下山を決定し、ジエルを見送りました。ジエルの背負ってきたザックはガイドが持ちました。山腹を登り、尾根上に出て暫くのパンガ Pangka からゴジュンバ氷河の末端までは岩場の登りです。この登りは街道歩きというより山登りの気分です。かなり急な登りで、腰痛からくる足の痺れが出た佐藤さんの歩みが遅くなりました。3時を廻り、日陰の道で寒さもつりました。急な登りが終わると歩き

やすい平坦な道になりました。二つ目の湖を過ぎると、眼前が大きく開けて、ゴーキョ・ピーク (5360m) が見えました。山頂に続く道が良く判りました。そこはまだ陽が当たつて暖かそうです。3番目の湖、ドウード・ポカリが現れ、湖畔のゴーキョのロツジ群が見えました。チョー・オユーを背負ったゴーキョは絵の様に美しく、それを背景にして交代で写真を撮りました。16:05 ゴーキョ (4790m) 着。まだ夕日が当たつてるので暖かいロツジ前の椅子に座つて、眼前に広がる湖を眺めました。寒さに震えて歩いてきたので誠に心地良いものでした。今日は900m近く登り返しました。

11月4日(木) ゴーキョからゴーキョ・ピーク往復(登頂)

トレッキング 13 日目。6:04 雲一つない快晴の絶好の登頂日和に心弾ませてロツジを出発しました。湖の北端に流れ込む沢を飛び石伝いに渡り、直ぐ先の尾根をジグザグに登りました。登り始めはまだ日陰で寒かったですが、7:19 登山道に陽が当たり暖かくなりました。30 分ピッチでゆっくり登ります。高度順応が十分出来ているので3人共、高山病の心配はありません。但し、佐藤さんは腰痛からくる断続的な足の痺れに苦しみました。痺れが来ると数秒しやがんで痺れを取ります。気丈な

佐藤さんは直ぐ歩き始めるのでそれほどの遅れになりません。心配した風も殆どありません。8:49、6ピッチでゴーキョ・ピーク (5360m) に着きました。

コースタイム 3 時間の所を 2 時間 45 分の登りでした。

期待通りの 360 度の大展望です。まずは北から東、チョー・オユーからエヴェレスト方面。チョー・オユー (8201m)、ゴジュンバ・カン (7806m)、ギヤチュン・カン (7922m)、P.K. 7020m、エヴェリスト (8848m)、ヌプツエ (7879m)、ローツエ (8511m)、マカルー (8481m) まで眼をこらして眺めました。写真ですか、或いは名前しか知らないヒマラヤの高峰を直に眺めて感激しました。夢中で写真を撮りました。西側にも黒々とした岩峰、雪をまとった高峰群(無名峰?)が連なります。これも写真に撮ります。ガイドのペルマさんにギヤチュン・カンをバックに3人の写真を撮ってもらいました。岡田さんが嬉しそうに写っています。カラ・パタールに登頂できなかつたのでゴーキョ・ピーク登頂はことの外、嬉しかったのでしょう。

チョコレート、羊かんを食した後、頂上を後にしました。眼下には荒涼としたゴジュンバ氷河が横たわり、その上空に聳えるチョラ

ツエ（6440m）、タウツエ（6542m）を見ながらの下りです。氷河湖ドゥード・ポカリも深緑の湖面に背後の白い山を映して幻想的です。

コースタイムの半分の1時間の下りで10:38 ロッジ着。当初の予定では、この日はマッチエルモまで下る予定でしたが、日程的にも余裕があるし、ロッジが快適であつたため、ゴーキョにあと一泊することにしました。夕食まで日当たりも良い食堂でそれぞれのんびり過ごしました。

11月5日（金） ゴーキョからポルツエ・タンガへ

トレッキング14日目。6:48 出発。ガイドがマッチエルモで下山したジエルの代わりを雇うと思いきや、トンコ君が1人でザック3つを背負ったのに驚きました。ロープだけでザックを横並びに上手に背負うのに感心しました。重さは40kg弱。心配しましたが、ナムチエまで歩き通しました。ロッジを出て直ぐに5~6羽のライチョウに似た鳥を発見し、夢中で写真を撮りました。昨日登ったゴーキョ・ピーク、その右奥のチヨー・オユーを何度も振り返り、名残りを惜しみました。登りに苦労したマッチエルモまでの道を柔らかな朝日を浴びながら、チヨラツエ、タウツエを左手に見ながら快適に下りました。道端に

花を見つけると丹念に写真を撮ります。ルザを越えラバルマ Lhabarma で小憩の時、青空に聳える白銀の双耳峰が目につきました。地図で Malangphulang (6573m) と 6464m 峰と同定しました。ドーレの先からは正面にカンテガ、タムセリクを見ながらの展望の良い下りです。14:09 ポルツエ・タンガ着。

たまたま一年で最大のお祭りといわれるティハールの祭りの最中であつたため、ロッジで楽しい催しに遭遇しました。食堂にクムジュン村から遊びに来た娘さんの集団がいて、歌や踊りを踊っていました。私が写真を撮つていいかと頼むと快く応じてくれました。そのうち、歌に合わせて2~3人がリズム良く踊り始めました。皆、楽しそうです。ネパールの若い娘さんの一年に一度のレクリエーションの姿を垣間見てこちらも心が和みました。それが終わると、祝儀集めに皆の間を廻ります。写真を撮った私の前の真っ先に来ました。続いて佐藤さん。お金が手元になかつた岡田さんが断るのに困ったこと。

11月6日（土） ポルツエ・タンガからモンジョヘ

トレッキング15日目。7:00 出発。今日の行程は短いので遅い出発です。最初から峠（モン・ラ MongLa）まで標高差300m、1時間半の急登に息を切らします。峠でコーラ休

花を見つけると丹念に写真を撮ります。ルザを越えラバルマ Lhabarma で小憩の時、青空に聳える白銀の双耳峰が目につきました。地図で Malangphulang (6573m) と 6464m 峰と同定しました。ドーレの先からは正面にカンテガ、タムセリクを見ながらの展望の良い下りです。14:09 ポルツエ・タンガ着。

たまたま一年で最大のお祭りといわれるティハールの祭りの最中であつたため、ロッジで楽しい催しに遭遇しました。食堂にクムジュン村から遊びに来た娘さんの集団がいて、歌や踊りを踊っていました。私が写真を撮つていいかと頼むと快く応じてくれました。そのうち、歌に合わせて2~3人がリズム良く踊り始めました。皆、楽しそうです。ネパールの若い娘さんの一年に一度のレクリエーションの姿を垣間見てこちらも心が和みました。それが終わると、祝儀集めに皆の間を廻ります。写真を撮った私の前の真っ先に来ました。続いて佐藤さん。お金が手元になかつた岡田さんが断るのに困ったこと。

11月6日（土） ポルツエ・タンガからモンジョヘ

トレッキング15日目。7:00 出発。今日の行程は短いので遅い出発です。最初から峠（モン・ラ MongLa）まで標高差300m、1時間半の急登に息を切らします。峠でコーラ休

憩。正面にホテル・エヴェレスト・ビューを遠望し、ナムチエ・バザールに戻つて来た感を強くしました。アマ・ダブラム、タウツエに聳える白銀の双耳峰が目につきました。地図で Malangphulang (6573m) と 6464m 峰と同定しました。ドーレの先からは正面にカンテガ、タムセリクを見ながらの展望の良い下りです。14:09 ポルツエ・タンガ着。

たまたま一年で最大のお祭りといわれるティハールの祭りの最中であつたため、ロッジで楽しい催しに遭遇しました。食堂にクムジュン村から遊びに来た娘さんの集団がいて、歌や踊りを踊っていました。私が写真を撮つていいかと頼むと快く応じてくれました。その後、歌に合わせて2~3人がリズム良く踊り始めました。皆、楽しそうです。ネパールの若い娘さんの一年に一度のレクリエーションの姿を垣間見てこちらも心が和みました。それが終わると、祝儀集めに皆の間を廻ります。写真を撮った私の前の真っ先に来ました。続いて佐藤さん。お金が手元になかつた岡田さんが断るのに困ったこと。

11月7日（日） モンジョからルクラヘ

トレッキング16日目。7:30 出発。今日は街

憩。正面にホテル・エヴェレスト・ビューを遠望し、ナムチエ・バザールに戻つて来た感を強くしました。アマ・ダブラム、タウツエに聳える白銀の双耳峰が目につきました。地図で Malangphulang (6573m) と 6464m 峰と同定しました。ドーレの先からは正面にカンテガ、タムセリクを見ながらの展望の良い下りです。14:09 ポルツエ・タンガ着。

たまたま一年で最大のお祭りといわれるティハールの祭りの最中であつたため、ロッジで楽しい催しに遭遇しました。食堂にクムジュン村から遊びに来た娘さんの集団がいて、歌や踊りを踊っていました。私が写真を撮つていいかと頼むと快く応じてくれました。その後、歌に合わせて2~3人がリズム良く踊り始めました。皆、楽しそうです。ネパールの若い娘さんの一年に一度のレクリエーションの姿を垣間見てこちらも心が和みました。それが終わると、祝儀集めに皆の間を廻ります。写真を撮った私の前の真っ先に来ました。続いて佐藤さん。お金が手元になかつた岡田さんが断るのに困ったこと。

11月7日（日） モンジョからルクラヘ

トレッキング16日目。7:30 出発。今日は街

道風景、ボツカ人夫、ヤク、ロバなどの写真を撮りながらルクラに向かいました。13:40 ルクラ着。16日間のトレッキングを無事終了。——もお祭りの賑わいが溢れています。狭い道路に人が一杯で、路上での演奏を聴いています。トレッカーは人をかき分けて進みます。行きに立ち寄ったロッジ泊。

11月8日（月）ルクラからカトマンズへ

7:40 の便でルクラ出発。空港まで荷物を担ぎ見送りしてくれる約束だったポーターのトンコ君が朝現れず、自分達でザックを背負う羽目になりました。彼には空港でチップを渡す予定だったので彼は貰いそこねた訳です。帰りの道中は3人のザックを1人で背負つてくれたので気の毒でしたが、本人の責任ですから仕方ありません。多分久し振りにまとまつた現金収入を得て、ティハイールの祭り気分に誘われて昨晩遊び疲れてどこかで寝過ごしてるのでしよう。それにしてもチップを貰いに来ないボーテーがいるとは驚きでした。

8:15 カトマンズ着。行きに泊まつたチベット・ゲストハウスにチェックインし、シャワーを浴びてさっぱりした後、タクシーでホタル・サンセットビューの敷地内の『ヒマラヤそば処』に行きました。本格的な天ざるに舌鼓みを打つて大満足。次にタクシーでコスモ

トレック社に移動し、大津さんを訪問し、トレッキング終了報告と精算をしました。夕食はホテル近くの日本食の店『おふくろの味』で、しようが焼き定食、カツ丼など日本の味を堪能しました。

11月9日（火）カトマンズ

今日も一日、買い物（地図、パシュミナ衣料、お茶）と日本食（ラーメン、ナスチリ定食……）を楽しみました。

11月10日（水）カトマンズから帰国

前夜から佐藤さんは体調不良の為、ホテルで休養。岡田さんと私は買い物とダルバール広場観光で夕方まで過ごしました。今日はタクシーを使わず、地図を片手に徒步でカトマンズを探訪し、カトマンズの地理に明るくなりました。夕方には佐藤さんの体調も回復し、夕食をホテルの近くネパール料理店で摂つた後、空港に向かいました。23:20 カトマンズ発。

11月11日（木）成田へ

香港経由で14:10 成田着。全行程を終え解散。

〈付記〉

1. 本稿は、トレッキングの行動概要と道中で眺めた高峰を中心に記述しました。ルートの詳細報告にはなっておりません。この

コースの案内、紀行は数多くありますのでそれらと重複する必要はないと考えました。たくさん咲いていたのが Gentiana Depressa です。濃い紫の花は、Gentiana Micans です。Gentiana はリンドウ科の意味です。

2. 帰国後、岡田さんが花を同定しました。たまたま咲いていたのが Gentiana Depressa です。

3. 費用、ロッジ事情（食事、トイレ・・・）、装備などは同じコースを行かれる人の参考になると思いますので別稿にて報告予定です（メンバーで手分けして執筆）。

4. カラ・パターは予期せぬ悪天候に見舞われましたが、予定していなかつたゴーキヨ・ピークに登頂し、心ゆくまでヒマラヤの高峰を直に眺めることが出来て大満足です。また、同じルートを帰るのではなく、違うルートを歩き、この山域をより広く知ることができ幸いでした。これは、現地で臨機応変に行動を組み替えた佐藤さんのリーダーシップのお陰です。事前の計画立案。諸手配と合わせて感謝します。

5. 岡田さんには現地で面倒な会計係（トレッキング中の費用の一括精算、公金の管理）を引き受けさせていただきました。帰国後、それらを早速纏められたことと合わせて感謝します。また、素晴らしい写真の数々、ありがとうございます。名カメラマンが一緒

で良かったです。

6. トレッキング中に心に留めた、或いはこの山域を再訪するなら行ってみたいコース

- (1) チヨラ・パス越え || 今回行けなかつたコース。自然が豊かで、景色が素晴らしいルート。タウツエやチヨラツエが間近に見え、アマ・ダグラムも全く違う角度から見えるとの事。

(2) チュクン・リ (5550m) || チュク

ンからゆづくり登つて4時間。カラ・パールやゴーキョ・ピークに勝るとも劣らない景観で、莊厳な山々と静かに向かい合うことができるとの事。

(3) レンジョ・パス越え || ゴーキョ・レンジョ・バスルンレーダモナムチエ (3日間)。ゴーキョからの静かな下山路ートは魅力的。ゴーキョ・ピークよりレンジョ・バスからの方がヒマラヤの展望がすぐれているとの事。

三月会通信

■平成23年1月17日■

【出席者】 佐薙、三井、遠藤、高橋、竹中、本間、小島、佐藤(久)、岡田、中村(雅)、金子、佐藤(活)、高崎(俊)、記録)

▽日本山岳協会ほか山岳関係5団体を中心

に「山の日」制定協議会が発足している様で

す。既に「海の日」は祝日として制定されていますから、自然の成り行きでしようか。その昔に比べて働くくなつた日本人がより働くなくなるぞ、と心配される意見も出ていました。また、今でも有給休暇の取りにくい状況は変わらず、国民の祝日を増やすしか余暇を楽しむ術はなかろう、と言う意見もありました。

▽90周年記念事業の候補の一つとして、針葉樹文庫で縁のできた芦安村との共同事業が考えられています。直前に偵察に行かれの方々から、周辺状況の話がありました。そもそも、芦安村の起源は何だ? 信玄の隠し湯伝説 鉱山があつた、奈良田へ抜け道の起点、どなたかご存じの方は居ませんか?

▽大弛に行かれた方々は、予定外の積雪に苦労されたようです。小屋(大弛峠)まで2kmの所まで車で入れるはすが、4輪駆動車に変更したにもかかわらず、6kmの所から歩く羽目になつた。ワカンを着用しても前日の新雪で積雪量が増えたことで、ラツセルも尋常ではない辛さだったそうです。飯は無くとも酒さえあれば、で有名な某氏が、この夜は飲む気がしなかつたほど疲れたそうです。

▽冬の八ヶ岳にもう一度、という元気な話もあります。赤岳鉱泉に泊まる、夏沢鉱泉に泊まる、などアプローチの便は良いのですが、寒さと強風が気になります。

5月連休の前後で、営業している小屋を調べて、唐松・五竜を八方尾根から、白馬を大雪渓から、岳沢小屋が使えれば前穂高へ等、後期・前期の高齢者の話題とは思えないような元気な話題も出ています。

また、昨年のエベレスト街道に続いて、今年は何処にしようか? アンナブルナ回遊路とか、ロールワリン・ラプチエ谷とか、ヒマラヤ・トレッキング隊が今年も出そ�です。

▽米国在住の加地さんから熱いご招待を受けているロッキー山脈登山計画は現役学生の参加が既に決まつたようです。来日された

加地さんと本間さん・川名さんが雑踏の

渋谷駅ハチ公前で苦もなく落ち合えたとい

う話は奇跡としか理解できません。

▽今年1回目の懇親山行は2月11日に、中央

線沿線の、富士山の眺めが素晴らしい倉岳

山です。なだらかな山容ですが、頂上直下だけは少し急な山道になるそうです。現在12名の参加が予定されています。参加を考えられる方は本間さんに連絡して下さい。

● 山行記録

佐藤 12／27 丹沢・大山～三の塔。単独

忘年山行、地酒とそばを大倉で。

三井 なし

遠藤 なし

竹中 1／5 チームバットレス、トレーニング山行 湯河原・幕岩。 藤原さんの指導下4本登る。平日でも大賑わい（中学生も）。終了後、本間さん、山本（益）さんと河原でBBQ。

本間 12／29～30 目的は国師岳往復 積雪。降雪のため大弛小屋まで。

1／10～11 登山道の現状チェック。

11 日 夜叉神峠～高谷山～桃の木鉱泉
11 日 峠登山口～（旧道）～芦安

1／13 倉岳山 2月懇親山行の下見、佐
藤さんと。

中村（雅） 1／10 夜叉神峠～高谷山～桃
の木鉱泉。芦安現地調査1回目、（上原さ
ん、本間さん、小島さんと4人）。期待以上
の成果あり。

金子 12／18 小海冬枯れウォーキ。フイ
ンランド冬至祭に合わせての20kmウォー
ク+雪藏訪問。

12／25 山形・吾妻山 豪雪のためリフ
ト再終点より500m程登つて敗退。

▽最近は参加メンバーにやや固定化のきらい
がありました。今回も若手（？）として
佐藤活朗さん（S53年卒）が参加してくれ
ました。「三月会」は敷居が高いという印象
をお持ちの方もいらっしゃるようで、その
理由として「近頃、山に行つてないから、
山の話題を持ち合わせない」事を上げられ
ましたが、これは誤解です。富士山学、丹
沢学、里山学、地質学、植物学、鳥類学、
神社学、古城学、英語学、歌謡学、等々何
時も記録係の薄学を試しているのではない
か、と思うほど話題の幅は広がっています。
是非気楽に顔を出して見て下さい。

■平成23年2月21日■

【出席者】 佐藤、三井、高橋、竹中、本間、
小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、金子、
井草、高崎（俊、記録）

▽2月11日に計画されていた懇親山行「倉岳
山」は悪天候が予想されたため中止になり
ました。実際、山は雪模様だった様子です。
その後の丹沢は大変良かつたという話が
ありました。

▽5月に計画している次の懇親山行は、八ヶ
岳スエーパートレール・シリーズの第1回目

で、八島湿原を出発点として、10kmコース、
20kmコース、30kmコース（尖石遺跡まで）
と体力・気力に合わせて選択出来ます。3
月中旬には「ご案内」が出るようです。

▽岡田さんから、3月の八ヶ岳計画をどうす
るか提案がありました。通年営業の「赤岳
鉱泉」をベースにして、阿弥陀岳に登りた
い希望があります。同行者を募っています。
▽山で遭難した場合の「保険」の話に關して
は、例え学生が事故に遭った場合、日本
では責任の所在が曖昧ですが、欧米では引
率者が責任を負わされるため、保険加入は
マストだそうです。最近日本でも、里山の
ボランティア活動中の事故もカバーするよ

うな保険が発売されているようです。万が一の場合を考え、是非、保険をかけてから山に登りましょう。

▽佐薙さんが、国立の古本屋で昭和7年に出版された「ヒマラヤ研究」という写真集を見つけられました。大判で、立ち読みが出来るようなチヤチな本ではなく、大変立派なものだそうです。昭和初期に長谷川伝次郎というお金持ちの探検家が実際に踏査して撮影した貴重な記録のようです。まだ店に置いてあるかも知れません。6,000円。

▽また貴重な「画文集」として「霧の山稜」が挙げされました。佐薙さんが山登りを始められる要因の一つになつた本だそうです。著者の加藤泰三氏は南方で戦死されたため、作品はこれ一つしかありません。芦安の「針葉樹文庫」に山本(健)さんの蔵書として保管されています。

▽現在流通している紙幣「千円札」の裏の富士山の写真は、岡田紅陽が撮つたものです。高橋(信)さんが社内報を作つてある頃、毎月、表紙の写真を貰いに岡田紅陽の吉祥寺の自宅に通われたそうです。富士山の写真を撮るために、山麓に一年中通い詰め、例えば、富士山とコスモスとを写しこむために、春にコスモスを植えに行つたという

類いの話が多くあります。忍野村に写真記念館があります。

▽下川又寛さんの思い出話から、南(亮進)さんのクラシック音楽への深い造詣に感心した話、昔はテント場でよく歌つたものだ、ヨーデルの上手な人も居た、石原さん、渡邊(嘉)さん、有賀さん。

▽霧島連峰は韓国岳が百名山の一つで、新燃岳の登山禁止区域には含まれませんが、日本百名山を目指す方々は、その中の火山にはチャンスがある時に早めに登つておく事が肝要です。三井さんは、十勝岳・岩手山を、火山活動の影響で計画通りの日程では登れなかつたそうです。御岳山、雲仙岳、阿蘇山、焼岳などが心配される火山です。

●山行記録
佐薙 2/8 篠坂峠→加古坂山(野鳥の会の探鳥ウォーキ)

2/1 & 2/16 オーショーン会中山道ウォーク。日帰りで漸く武藏から上野の国へ。

竹中 1/9 如水会町田支部歩こう会(鎌倉七福神巡り)。鎌倉駅西口から長谷寺→歩く(21・8千歩)。

2/16 ~ 2/17 塔の岳→鍋割山→寄。ひるから会恒例の新年会。関東の大雪の後

の大倉尾根、鍋割山稜、(竹中、本間、門脇、高橋)。

2/20 日本山岳会東京多摩支部・町田サロン山行。里山歩き(小田急・黒川→唐木田)(24・5千歩)

1/30 日本山岳会東京多摩支部年始晩餐会山行。多摩・よこやまの道(永山→唐木田)(20・7千歩)

中村(雅) 2/3 猿橋→百蔵山→扇山→四方津。藤原さんと一緒に藤原さんにはローペース)について行けず、扇山で足が痙攣。権現山→雨降山→上野原の予定は取り止め四方津に下山。

井草 2/16 ~ 2/17 古里→鳩ノ巣。間伐作業。ヒノキを切り倒すんですが、木が混みあつてるので掛かり木になつてしまい、作業の大半は綱引き作業。ダイエツトには効果絶大。

金子 1/24 阿馬山。元の会社のハイキング部に参加。山ガール満開の楽しい旅。
2/3 渋沢丘陵。雪のため八ヶ岳断念。代わりに丹沢を眺めに出かけた。久し振りに真っ白な丹沢表尾根。
三井 なし
高崎 なし
本間 2/8 ヨモギ尾根(三の塔→同尾根→大倉)。ヨモギ尾根下見。

2／16～17 大倉尾根～塔の岳(泊)～鍋割山～櫟山～寄。昼から会の新年会。

▽三月会の開会時間に先だつて、90周年記念事業の企画検討会が開催され小島さんを中心各種の案が検討されました。

■平成23年4月18日■

【出席者】 佐羅、三井、遠藤、高橋、竹中、小島、三森、佐藤(久)、岡田、中村(雅)、金子、井草、高崎(俊、記録)

▽3月度は東日本大震災による国家的大損害を考慮して中止としました。3月中の如水会館の稼働率は大変低かつたようです。この日もお客様さんは疎らでした。東京でも未だに余震が収まらず、不安な日が続いています。

▽また過日、山本尚穎さんを追いかけるように、三月会の常連でもいらした中川滋夫さんが急逝され、我々の意気も上がりません。▽針葉樹会報は、山本さんの追悼号を6月に、中川さんの追悼号を10月にそれぞれ刊行出来るように、会報幹事の皆さんのが準備を進めています。

▽井草さんが自家製「花わさび」の醤油漬けを持参されたが、会館の係員の目にとまつてしまい、美味を味わえたのは残念ながら数人に止まってしまいました。

▽「新緑の宴」は4月23日(土)に計画されています。学生さんの参加も見込めるので、大勢の会員の参加を期待しています。

▽3月4月の天候が安定して雪の残っている季節に高い山に登ろうと、皆さんいくつかの腹案をお持ちの様でしたが、大部分が延期になっています。佐羅さんの白馬岳もしくは唐松岳、5～6月に須走口からの富士山、岡田さんの南八ヶ岳、等々。大震災の「風評被害」で東日本の観光地は大きな打撃を受けている様ですが、行き過ぎた「自肃」ムードを解消するためにも、是非、連絡を取り合って成功させて下さい。

▽次回の懇親山行は全長約200kmの八ヶ岳スリーパートレール・シリーズの第1回目として、八島湿原を出発、10kmコース、20kmコース、終点はアダージオ、で計画されています。

●山行記録

佐羅 3／8～9 丹沢山域(小丸)～塔(泊)
丹沢山往復後下山。前日の雪。雪深く蛭まで行けず。同行者 本間さん。

三井 3／10 陣馬山(藤野から往復)。一橋同期の友人と6人で。途中から雪道になり、頂上では15cm。

竹中 3／10 東京多摩支部町田サロン・厚木鳶尾山～八菅山 多摩支部個人山行。花

見に。

三森 特になし。地震発生時、日光東照宮前をドライブ。

佐藤(久) なし
高崎 なし

中村(雅) 3／8 高峰温泉から高峰山往復。スノーシューリング(家内と)。

3／9 高峰温泉から水ノ塔山往復。スノーシューリング(家内と)。

金子 3／4～7 香港ハイキング。ガイドブック発行後初めてのツア―。7名。大変喜んで貰いました。

井草 3月中 奥多摩で農作業。

▽小島さんの呼びかけで90周年記念事業の打ち合わせが16時から始まっていて、「流れ開会」になりました。90周年事業の方は、何とか先が見えて来た感じがありますが、予算との兼ね合いで何をするのか何が出来るか、取捨選択せねばなりません。

▽時期が遅れてしましましたが、佐々木さんの第5回「富士山検定」1級トップ合格のお祝いが今日の主題と考えてきました。ところが、ご本人の雲隠れ(?)で祝勝会は延期になりました。(次回の懇親山行準備で蓼科のアダーディオに先行されていた?)。我こそは、と思われる方は先ず「過去問」で腕試しは如何でしょうか? インターネットで「富士山検定」で検索すると、3級認定(入門編)上級検定(1級、2級)の試験問題、模範解答を見ることが出来ます。

▽井草さんが「わさび」の育成に力を入れています。奥多摩駅から直ぐの、日原川の支流に「ワサビ田」と、「納屋」を仲間4人で保有して、毎週のように出かけて手入れをしているそうです。労力提供のヴォランティアは歓迎、ただし、かなりの重労働のようです。新鮮なワサビを味わいたい方、体力に自信のある方はどうぞ。

▽学長を務められた石さんが少しの時間でしたが顔を出されました。放送大学の仕事も

3月で終わったので、これからは針葉樹会の活動に献身する、との力強い決意声明を頂きました。

●山行記録

三井 なし

竹中 4/26～4/27 丹沢オートキャンプ場～三の塔の肩～塔ノ岳～棚沢の頭～ユーシン経由玄倉。昼から会山行(本間さん他)ヨモギ平～表尾根は馬酔木が満開。棚沢の頭からは標識を探しながら。

5/14 笹尾根(浅間峠～笛吹峠)。多摩支部・分境嶺踏査の第6回。46名(会員27、一般19)参加。絶好のハイキング日和にノンビリ歩く。

本間 4/26～4/27 竹中さんと同じ。
2日目、棚沢尾根・玄倉林道とキツイ。

5/6 湘南高麗山。

高橋 4/26 宮地山(丹沢)。新松田からバス寄り。田代向で降りる。クラスメートと。

中村(雅) 5/11 四国剣山(見の越)～頂上ヒュッテ

5/12 (頂上ヒュッテ～見の越)

5/13 石槌山往復(石槌山温泉から)。家内、長男、家の妹と4人、悪天予想が外れ、剣山は小雨、石槌山は晴天でGood。

◇今号は山本尚穎さんの追悼集となりました。次号で追悼予定の中川滋夫さんと共にヤロー会のメンバーが、まさに突然に旅立されました。お一人とも昨年までお元気にしておられた方ですから、ほんとに寂しく信じられない思いです。ご覧のようにたくさんの方が山本さんの追悼文を寄せてくださいました。文章も勿論ですが、写真の全てが、あのショーティさんの姿を捉えていて今にも大きな声で話しかけてこられるのではないかと感じるほどです。御冥福を心からお祈りいたします。

追悼文の後になりますが、中村（保）さんのポーランドでの朗報、中村（雅）さんのヒマラヤ報告、そして原さんの「我々の現役時代」、いずれも元気な寄稿を頂きました。今後ともこうした寄稿が多くなつて欲しいと今は特に思いました。（小島）

◇3・11後、初の会報になりますが、みなさま、いかがお過ごしでしょうか。人の生死や日々の暮らしのかけがえのなさについて考える時間が、いつもより長かったのではないか。本号のショーティさんへの追悼文にも、思わず線をひきたくなるようなフレーズがいくつもありました。「五常の徳を

大切にしていた男（大橋さん）」「まことに爽やかなものを、いつまでも持ち続けるという心のかたち、そこにこそ人間としての究極の存在感がある（倉知さん）」「優しい製のある物言いをされるお人柄（三森さん）」……思いを込めて書かれた一文一文から、「生への贊歌」の珠玉の一楽章が聞こえてくるようです。追悼号なのになぜか明るさを感じます。ショーティさんの針葉樹会への最後のプレゼンントなのかもしれません。

◇中村雅明さんのトレッキング報告には、「あれこれ」と「行動表」が付いていましたが、スペースの都合で割愛させていただきました。その部分は一橋山岳会HPに掲載される予定です。

奥多摩の越沢バットレスの近くには、バットレス・キャンプ場とガーデン・キャンプ場の二つがありますが、そのうちのバットレス・キャンプ場の主人「昌ちゃん」は、面倒くさがってお客様を取りたがらないという変わったおやじですが、ご利用があるようでしたら井草までご一報ください。

（井草）